
“ 魔術戦隊 ” 隊員募集中

現地 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“魔術戦隊” 隊員募集中

【Nコード】

N53910

【作者名】

現地 晶

【あらすじ】

異世界から来た怪しい生物の怪しい事情に巻き込まれた者達の、敵そつちのけの微妙な日常。サラッと読み流す系。

今日も隊員達は「レッド」が経営する喫茶店に集まる。

（戦隊ヒーローものではありません。R15ですが性描写はありません。後味の悪い話あり、苦手な方はご注意ください）

ピンク来店

人通りの少ない細い通り。

そこに大きな三角屋根の古ぼけた建物が建っている。

窓はレースのカーテンが閉められていて中を見る事が出来ず、雰
囲気は何かの店のようだが看板も何も無い。

たまにこの道を通る人々も気に留める事無く通り過ぎて行くそん
な怪しい建物に、一人の少女が近付く。

茶色く染めた長めの髪に、肩に掛けた鞆。

背はそれ程高くないが、小さな顔と細い体はまるでモデルのよう
だ。

今時の若者といった感じの少女だが、着ているのは有名な進学高
校の制服である。

その少女は建物の前まで来ると、躊躇なくドアを開けた。

「こんにちは、レッド」

少女は中に入り、カウンター席に腰掛けて隣の席に鞆を置いた。

「いらっしやい、ピンク」

カウンターの中に居る男が笑う。

やはりここは店 喫茶店のようだ。

レッドと呼ばれた男は歳は二十代後半ぐらいで、短い黒髪に中肉
中背の体つき、Ｔシャツとジーパンの上に赤いエプロンをしていた。

「何にする？」

「カフェオレ」

「ん。ちよつと待ってね」

レッドが冷蔵庫から牛乳を取り出して鍋に注ぐ。

「ラッキーは？」

「居るよ」

レッドはカウンターの奥から居住空間である二階に向かって叫んだ。

「ラッキー！ピンクが来てるぞ！」

すぐに「ふぁーい」と気の抜けるような返事が聞こえ、ラッキーが飛んで来た。

そう、『飛んで』来たのだ。

鮮やかな緑色をした体長三十センチぐらいのその生物は、体をすっぽり覆える程の長く垂れ下がった大きな耳とハムスターのような顔と体、よく見ると手足は人間と同じ五本指で、馬のようなフサフサの尻尾がお尻に生えている。

それがフワフワと空中を飛びながら一階にやって来たのだ。

「ピンクしゃん、こんにちはでシ」

ラッキーはカウンターの上に二本足で立って、ピンクにペコリと頭を下げた。

「こんにちはは、ラッキー。何してたの？」

「魔獣のデータをまとめたり、新しい魔具まぐの開発なんかやってたでシ」

「ふーん。そっか、ちゃんと仕事してたんだ。偉いね」

ラッキーは深く溜息を吐き、恨みがましい視線でピンクを見た。

「そう思うなら、もうちょっと協力してくれてもいいのではないでシか？」

「あ、そんな事より、聞いてよレッド」

ラッキーの恨み言を華麗に無視し、ピンクはレッドに視線を移す。「さつきさあ、ここ来る途中の道で、変質者っぽい男がジーツとあたしの事見てたんだよ、気持ち悪い」

「え？変質者？」

レッドが眉を寄せながら、ピンクの前にカフェオレを置いた。

「そう。ヨレヨレのスーツ着て頬の瘦けた男がさあ、道の端に座って見上げてくるの。なんかヤバい感じだった」

「この辺は人通りが少ないし、気を付けた方がいいよ。防犯ベルとか持つてる？」

「持っていない」

ピンクが首を振る。

「じゃあ買った方がいいかも」

「捕縛すればいいでシ」

ピンクとレッドが「え？」とラッキーを見る。

ラッキーはピンクの左手中指にはまっている指輪を指差した。

「それで捕縛すればいいでシよ」

ピンクは驚いて中指の指輪に視線を移し、レッドも自分の指にはまった指輪を見た。

「これ・・・人間にも効くの？」

「はい。勿論でシ」

ラッキーから渡されているこの指輪は、こちらの世界で暴れる『魔獣』を捕まえあちらの世界に強制送還する為の『魔具』である。

「おい、何でそんな大事なこと今まで言わなかったんだ」

「そうだよ、うっかり通りすがりの人をあちらの世界に送っちゃったらどうすんの」

しかしラッキーは笑顔で首を横に振る。

「大丈夫でシよ。あちらはとっても素敵な世界でシ。ラッキーの主人様も優しくして親切な方でシから、送られた人もきつと幸せな人生を歩めるでシ」

「・・・そこは嘘でも『戻って来れる』と言ってくれ」

ピンクが大きな溜息を吐き、カウンターに突っ伏した。

「はああ・・・。あたし何でこんな面倒な事に巻き込まれたのかな」

「運が悪かったでシね」

「お前が言っなよ」

レッドがラッキーの耳を掴んで持ち上げ、目線を合わせる。

「協力してやってる俺達に、感謝の気持ちがないんじゃないか？」

「あれ？いいんでシか？そんな態度シるなら『ドカン』とやってもいいんでシよ」

「……」

レッドはそつとラッキーをカウンターの上に戻した。

「物分かりが良くて嬉しいでシ」

乱れた毛並みを手で整えるラッキーに、レッドが呟くように言う。

「……お前、どこが『ラッキー』なんだよ。むしろ俺達には『アンラッキー』だ」

「酷いでシね。異世界生物だって、そんな事言われたら心が傷付くんでシよ」

「……」

レッドとピンクが同時に溜息を吐いた。

イエロー来店

朝六時。

「起きるでシ！ 朝ご飯作るでシ！」

ラッキーの声で目覚めたレッドは、大きな欠伸をしながら身体を起こした。

「おはよう、ラッキー」

「お腹空いたでシ！」

「はいはい」

ラッキーは小さいのによく食べる。

一日三食では足りずに、間にも食事やおやつを催促してくるのだ。布団を畳んで着替え顔を洗うと、レッドは一階に降り、その後をラッキーがフワフワと飛んで付いて行く。

「パンか米か」

「日本人なら米を食え！ でシ」

「お前、異世界生物だろうが」

ご飯に味噌汁焼き魚、そして結局パンに卵焼きにサラダに肉、アイスクリームまで食べて、漸くラッキーは「ごちそうさまでシ」と言った。

「本当によく食うな」

食器を片付けながらレッドが呟く。

「あちらの世界に居た時は少食だったのでシけどねえ」

「病気じゃないのか？ あっちに帰った方がいいぞ」

「そんな事言つて、厄介払いしようとしても無駄でシよ」

ラッキーが鼻で笑ってカウンターに寝転んだ時。

コンコン。

窓をノックする音が聞こえた。

レースのカーテン越しに見える人影。

レッドはカウンターから出ると、まだ鍵の掛かっていたドアを開けた。

「いらっしやい、イエロー」

「よう。朝飯食わせてくれよ」

店に入って来たのは、肩に掛かる長めの金髪に耳にピアスを沢山付けた、二十代前半に見える細身の男だった。

男 イエローはカウンター席に腰掛け、レッドやピンクと同じ指輪がはまった指で、ラッキーの頭を弾いた。

「よう、『グリーンデビル』」

「誰が『デビル』でシか！ こんな可愛いラッキーに向かって失礼でシ！」

ラッキーが頬を膨らませて耳を振り回す。

カウンター内に戻ったレッドがラッキーを押し退けて訊いた。

「イエロー、パンと米、どっちにする？」

「パスタ」

「・・・了解」

レッドは苦笑して鍋を取り出す。

「これからバイトか？」

「いや、帰り」

イエローはフリーターをされていて、しかもコロコロとバイトをかえる。

今度は夜間のバイトをし始めたようだ。

「いつもいつも、イエローは失礼でシ。勝手に変な名前と呼ぶんじゃないでシよ。調子に乗っていると『ドカン』とやるでシよ」

ラッキーはブツブツと文句を言いながら、二階へと飛んで行った。

「やっぱり『デビル』じゃねえか」

鼻を鳴らしながら煙草を取り出すイエローの前に、レッドは灰皿

を置いた。

イエローは人にあだ名をすぐ付ける。

ラッキーに連れられて初めてこの喫茶店に来た時に、『魔術使つて敵と戦うって戦隊ヒーローみたいじゃね?』と言い、『じゃあ俺イエロー、お前レッド』と言い放つたのだ。

子供の時に魔術を使って戦う戦隊ヒーローものがやっていて、イエローはそれが好きだったらしい。

その後仲間入りした少女も『ピンク』に決まり、ヒーロー三人と異世界生物一匹の微妙な『魔術戦隊』が出来上がった。

「ナポリタンだよな」

「ああ、ウインナーはタコさんにしてくれよ」

「・・・何かあったか?」

こういう細かい注文をしてくるのは、何か嫌な事があった時。短い付き合いだがレッドはそれを知っていた。

「あー、ババアがさあ・・・」

「ああ、お義母さん」

イエローの実母は小学生の時に亡くなり、その数年後父親が再婚して出来た義母とイエローはあまりうまくいってなかった。

「『定職に就け』ってまた電話してきやがってよ」

イエローは煙草の灰をトントンと灰皿に落とす。

「俺は好きでフリーターやってんだよ。気に入らなければ速攻辞めれるし、好きな時間に働ける。だいたい、ちゃんと金稼いで一人で生活してるだろ? 迷惑なんてかけてねえのにさあ」

「うん」

「俺間違つた事言つてねえだろ?」

「そうだなあ・・・」

「・・・」

「・・・」

二人は黙り込む。

暫くの間、イエローが細く煙を吐く音と、レッドの包丁の音だけ

が店内に響いた。

「・・・心配してくれる人が居ていいじゃないか」

レッドがザツとスパゲティをフライパンに投入する。

「ケツ！ 何が心配だよ。『大学出してやったのに世間体が悪い』とか意味不明な事いいやがってよ」

「そうか。ほら出来たぞ」

レッドはナポリタンをカウンターに置いた。

上に載っているウインナーはしっかりとタコさんだ。

「お、旨そう。いただきます」

煙草を灰皿に押し付け、イエローは両手を合わせて頭を下げる。

派手なナリで口も態度も決して良くないが、食事のマナーだけは良い。

「愛されてると思うけどなあ」

「ん？」

顔を上げたイエローに、レッドは首を横に振った。

きつと全力で否定してくるだろうから。

「お前って憎めない奴だよな」

イエローが眉を寄せる。

「何だ？ 急にそんな事言って。金ならねーぞ」

「金の無心じゃねえよ」

レッドは笑いながらカップに珈琲を注いでナポリタンの横に置いた。

今更だけど語ってみよう

数年ぶりの同窓会からの帰り。

久し振りに会った仲間と過ごす時間は楽しく、二次会三次会と誘われるままに参加した俺は珍しくしこたま酔っていた。

千鳥足で夜道を歩き、もうすぐ家が見えてくるという所で、不意に何かまるで大型の獣が吠えるような声が聞こえて俺は立ち止まった。

しかし周りを見ても何もいない。

何処かの飼いだの遠吠えだったのかと思い、俺は再び歩き出す。するとまた獣が吠えるような声が聞こえた。

やはり何かいるのか？まさか熊か。

冷静に考えればこんな山の無い所に熊が居る訳ないのだが、最近街中に熊が現れたというニュースを観たばかり、しかも酔っていたのでそう思ってしまった。

俺は急に怖くなり、立ち止まる。

右、左と見て何も居ない事を確認してホッと息を吐く。

やっぱり犬だったかと笑った次の瞬間、突然目の前に、身長が二メートル以上もありそうな化け物が現れた。

そう、化け物。

強いて言うならそうだな、頭が羊で顔は狼、身体は牛。

それが二本足で立って、鋭い牙と爪を俺に向けていた。

『ヤバい』とは思ったが、あまりの驚きに身体は動かない。

俺に向かって大きく口を開ける化け物。

夢か？夢だな、これは夢だ。と現実逃避した時。

フツ・・・と、その化け物は消えた。

そこにはいつもと変わらぬ風景が広がるばかり。
酔い過ぎて幻を見ていたのか？
呆然とする俺の耳に聞こえた声。

「あー、見られてしまったでシね」

驚いて声のした方向を見ると、空中に浮かんだファンタジーな生物。

しかもこちらに向かって飛んで来るではないか。

長い垂れた耳をしたハムスターのような見た目のそいつは、手に持っていたファンシーな杖を振り回しながら凄い勢いで話し出した。
「どうするでシかねー。記憶消去？うーん一部だけ消去するのって難しいでシよ。死んでもらうでシか。いやいや、ご主人様に愛玩動物として献上するというのも あわ？まだいたでシか。一、二、三・・・多いでシね。困ったでシ、ラッキーはあまり戦闘は得意でないでシよ。そうでシ！お前手伝うでシ！」

ファンタジーな生物は、俺の指に複雑な模様の描かれた指輪をばめた。

「ほい、それをあつちの・・・えーと、こっちの言葉で言うと『魔獣』でシね、で、魔獣に向けて『捕まえるぞー』と念じてみるでシ。早くしないと死ぬでシよ」

「・・・」

何がなんだか分からない。

分からないが先程現れた化け物と同じような化け物達が、再び迫って来ている。

死にたくない俺は指輪を化け物に向け、言われた通り『捕まえる』と強く念じた。すると・・・。

指輪から紐状の光が飛び出して獣の体をグルグル巻きにし、そし

て光ごと化け物は消えた。

「おおお？人間でも使えるのでシね。やってみるもんでシ。その調子であつちの魔獣もやっつけるでシ」

背中を杖で押され、俺は恐怖しながらも残る化け物を倒した。

精神的にも肉体的にもヘトヘトになり肩で息をする俺に、ファンタジーな生物は満足げに笑う。

「いやーいいでシ。使えるでシ。よし！下僕にしてやるでシ」

そう言つて何処から取り出したのか、直径十センチ程の逆三角形の金属板を俺の左腕にペタリと貼った。

驚いた事に、板は腕の肉の中に少し沈んで腕と一体化してしまつた。

慌てて取り除こうとしたが取れない。

「それはラッキーの気分次第で『ドカン』といく魔法の道具、略して『魔具』でシ。ところでちよつと何処か落ち着ける場所に移動したいでシ」

ドカン・・・？ドカンとはつまり爆発という事か？

ファンタジーな生物に俺は命を握られたのか？

まさかそんな馬鹿な。

とにかくこの状況はいつたいていどうなっているのだ？

俺は拳を握りしめて何とか気持ちを落ち着け、ファンタジーな生物を家に案内した。

「ほお。ここがお前の住みかでシか」

珍しそうにキョロキョロしてあちこち触りまくるファンタジーな生物に、俺は説明を求めた。

「ラッキーはラッキーって名前でシ。こことは別の世界から来たでシ。さっきの魔獣などがあちらの世界から逃げて、ラッキーはご主人様の命令で捕まえに来たでシ。魔獣は普段はこつちで言うネズミっぽい可愛い生物でシが、ちよつとしたきっかけで巨大化して凶暴化するでシ。お前はラッキーに協力して魔獣を捕まえるでシ。ここはなかなかいいでシな。ラッキーはここに住むでシ。逆らつたらド

カンでシよ」

「・・・で、俺は良く分からないまま巻き込まれ、ラッキーはここに居座るようになったんだ」

レッドはフウッと溜息を吐いた。

「何だ。俺の時と似たような感じか。つまんねえ」

頬杖をついて話を聞いていたイエローが言うと、その横に座っているピンクも頷いた。

「あたしの時もほぼ一緒だよ」

レッドが眉を顰めて立ち上がる。

「お前達が聞きたいって言ったから話したのに。 珈琲飲むか？」

こうして『今更だけどそれぞれ巻き込まれた時の事を発表してみよう』は、あっさりと終わった。

巨大ロボットと新隊員募集

うーん、と指輪を見つめ唸るイエローに、レッドが訊いた。

「どうした？」

「ああ、この指輪だけどなあ」

夕方、店内にはレッドとイエロー、それにラッキーのみが居た。

看板を出している訳でも広告を出している訳でもないこの喫茶店は何時でも閑古鳥が鳴いていて、ラッキーが堂々とカウンターに座つていても問題がない。

もし客が来てもラッキーの事は『最新のぬいぐるみ』と言い張ろうとレッドは思っていた。

「・・・地味じゃね？」

「は？」

「だから、普通『魔術』つつつたらこう呪文唱えたり魔方陣が出てきたりするだろ？それなのに『念じる』って何だよ？光が出て敵捕まえて消えて、はい終わり。おかしいだろ」

「・・・」

レッドが首を傾げて曖昧に笑う。

イエローの言っている事は分かる。

漫画やアニメ、イエローは特撮のイメージから言っているのだろうが、あれはあくまで作り物である。

現実的に考えれば呪文なんて覚えられないし、魔方陣が出てこれらなくても困る。

返事に窮していると、ラッキーが思い切り馬鹿にした表情で鼻を鳴らした。

「イエローは馬鹿でシね。子供みたいな事ばかり言って、それで成人しているとは信じられないでシ。地味とか言うけど、現実なんてそんなもんでシよ」

「お前が現実語るなよ！」

イエローがラッキーの頭を掴んで揺さ振る。

「うぎい！そんな乱暴するとドカンといくでシよ！」

ラッキーが手足をばたつかせて暴れた時、入口のドアが開いた。

「こんにちは。あれ？また喧嘩してるの？」

店に入って来たピンクは、イエローの横に腰掛けてラッキーの頭を撫でた。

「ピンクちゃん！イエローが酷いでシ」

「ピンク！お前も地味だと思っただろ？やっぱ魔術は派手じゃないと駄目だろ？」

ピンクは首を傾げてレッドを見た。

レッドが苦笑しつつ説明する。

「指輪の機能が地味だとイエローは言っているんだ」

「『機能』って・・・でも確かに地味だけど」

自分の指にはまっっている指輪を見つめるピンク。

同意して欲しくなかったレッドがフウ・・・と息を吐いた。

「だろ？ほらみるグリーンデビル、ピンクも地味だと言っている」

ピンクという味方を得たと勝ち誇った顔のイエローに、ラッキーはニイっと笑った。

「ではイエローの指輪は呪文を唱えないと発動しないように改造するでシ。でも呪文を唱えている間に魔獣に倒されても知らないでシよ」

「・・・」

魔獣にやられていい筈がない。

あれ程鋭く尖った爪や牙の一撃を受ければ、その先に待つのは死だけだろう。

イエローはうなだれて頭を抱えた。

レッドが立ち上がり、そんなイエローのカップに珈琲を注ぐ。

「ピンクは？」

「あたしも珈琲」

「ん」

棚からカップを出したレッドは、珈琲を注いでピンクの前に置いた。

「でも、だったら」

イエローが顔を上げる。

「せめて巨大ロボットはどうだ。合体するやつだぞ」

「イエロー、街が壊れるだろ？」

否定するレッドを軽く睨み、イエローは続ける。

「剣とか銃とか、みんなの力を合わせて発射するバズーカとか、無理ならバトルスーツ姿に変身するだけでも・・・ちよつとくらい子供の頃の夢を叶えてくれたっていいだろうが、協力してやってんのによ」

そこで「あつ」と声を上げてピンクがパンツと手を叩いた。

「そうだ、あたし思ってたんだけど、今って魔獣が出て来るのを待つてる状態でしょ？そうじゃなくて『魔獣レーダー』みたいな作って探しに行けばいいじゃない」

ピンクの意見にラッキーは唸って頭を掻く。

「実はやってるでシよ。でも何て言うか・・・結界と言えば分かり易いでシかね、で妨害されて駄目でシ。結界外に出てくれば分かるでシが」

ピンクが眉を顰めて溜息を吐く。

「そっかあ・・・」

レッドがカウンター内の椅子に座りながら苦笑した。

「早く敵さんにお帰りいただいて、ラッキーもこの『ドカン装置』を俺達から外して帰ってくればいいんだけどな」

「魔具でシ！とところでレッドとピンクに相談でシが、この件が片付いたら一緒にあちらの世界に行かないでシか？ご主人様をお願いして高官に取り立ててもらおうでシ」

「え・・・？」

レッドがポカンと口を開け、ピンクは一瞬目を見開いた後、慌ててブンブンと首と手を振った。

「ごめんね！あたし、この世界が好きだから無理！」

「あー・・・俺もだな」

「そうでシか？でも気が変わったらいつでも言うてシよ」

二人はホツと胸を撫で下ろす。

今の生活に不満がある訳でもないのに、どんな世界か分からない場所に飛び込む勇氣など無い。

「何で俺様は誘わないんだよ。まあ、いいけどよ。それより・・・」

イエローは頬杖を付いて珈琲を啜る。

「隊員が三人つて微妙だよな。最低でも五人いれば格好がつい」

ギョツとしたレッドがカウンターから身を乗り出してイエローの口を塞ぎ、ピンクがラツキーの耳を塞いだ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・聞いたでシ」

レッドが溜息を吐いてイエローの口から手を離し、渋い表情で自分のこめかみを叩く。

「イエロー、何てこと言ってくれんだ。巻き込まれるのは俺達だけで十分だろ？世間にラツキーの事がバレて、ややこしい事になったらどうするんだ」

「そうでシねえ。イエローのような役立たずを切り捨てて、新しい下僕をつくるという手もあったでシね」

「ほら、やる気になっちまっただろう。ラツキー、やめてくれよ。

あまり派手に動いて世間にバレて困るのはラツキーも同じだぞ」

「そうそう。科学者の元に連れて行かれて解剖されちゃうよ」

昔テレビで見たNASA職員に連行されるリトルグレイの映像を思い出しながらピンクが頷く。

「解剖されちまえ」

「そんな事言うつとドカンでシよ」

「・・・・・・・・」

悔しげに睨み付けるイエローを鼻で笑い、ラツキーはフワフワと

飛ぶ。

「まあでもラッキーの仕事は魔獣達の回収であって、こちらの世界で騒ぎを起こす事ではないでシからね。レッドもピンクもそんなに心配しなくても大丈夫でシ。ラッキーはイエローと違って頭がいいので軽はずみな行動はしないでシ」

「何だとグリーンデビル！」

掴み掛かろうとするイエローを避け、ラッキーが舌を出す。

「ベロベロ〜でシ！」

狭い店内をむきになって追い掛けるイエローと逃げるラッキー。

そんな二人を見つめながら、レッドがボソリと呟いた。

「軽はずみな行動はしない？絶対嘘だな」

「そうだよな。軽はずみな行動の結果がこれだもんね」

もう少し考えて行動してくれば、もしかしたら自分達が巻き込まれる事もなかったかもしれない。

レッドは珈琲ポットを持ち上げて見せ、ピンクに訊いた。

「珈琲もう一杯飲むか？」

「あたしお腹すいたな」

「チョコケーキがあるぞ」

「食べる！」

冷蔵庫から取り出したケーキを、レッドはピンクの前に置いた。

ピンクとイエローの関係

「俺達、付き合うことにしたんだ」

突然の告白に、レッドは一瞬言葉に詰まった。

「おいおい、三人しかいない隊員のうちの二人が付き合ったら、残された一人が気まずい思いをするだろ？」

「グリーンデビルと付き合え」

「人間でないこととメスでないことのどちらからつつこめばいいんだ？」

カウンター席に座っているイエローとピンクが笑う。

レッドは溜息を吐いて、それから苦笑した。

「まあ……あれだ、おめでとう。大事にしるよ」

「当たり前だ」

自信満々に頷くイエローにさらに苦笑した時、後ろでガタンと音がする。

レッドが振り向くと、そこには目を見開いたラッキーがいた。

「嘘……、嘘でシよね？　ピンクちゃんがそのロクデナシと付き合うなんて……」

イエローがそんなラッキーを鼻で笑う。

「ああ？　本当だけど？」

「嘘でシー！」

ラッキーはビュンと飛んでピンクの胸に縋り付いた。

「嘘でシ嘘でシ！　ピンクちゃんはラッキーのお嫁さんになるんでシー！」

「どつやってだよ」

「うるさいでシ！　下等生物のくせに生意気でシー！」

ラッキーが人間をどのように思っているのかチラリと垣間見れたところで、ピンクがラッキーの頭を撫でる。

「ごめんね、ラッキー」

「う……！ ピンクしゃん」

ラッキーは実に嘘くさい涙を流しながら、ピンクに訴えた。

「ピンクしゃんは騙されているでシ。骨の髄までしゃぶりつくされてポイツと捨てられるでシよ」

「人聞き悪いこと言うな！」

「あの男の何がいいのでシか？ 身体でシか？ あんなところやこんなところを既にしゃぶりつくされたでシか？」

「おい……！」

イエローがラッキーをピンクから引き剥がす。

「ふざけんなグリーンデビル」

「そっちこそふざけるなでシ！ どっちがピンクしゃんに相応しい男か決闘で決めるでシ」

「望むところだ」

イエローは立ち上がり、テーブルと椅子を壁ぎわに寄せて振り向いた。

「おら！ どっからでもかかってこい！ ただし魔術は無しだぞ」

「魔術がなくても楽勝でシ！」

ラッキーがイエローに飛び掛かる。

レッドはそんな二人をやれやれと言う感じで見つめ、冷蔵庫からケーキを出してピンクの前に置いた。

「はい、お祝い」

「ありがとう」

ピンクがケーキにフォークを突き刺す。

「良かったなあ。ずっと好きだったんだろ？」

「え？ やだ、気付いてたの？」

「まあな。ピンクは分かりやすいから」

ピンクは頬を赤くして恥ずかしそうに笑った。

レッドは思い出す。初めてラッキーに連れて来られた時のピンクを。

今時珍しい、染めていない真っ黒な長い髪と眼鏡。校則通りの膝下五センチ丈のスカート。

俯き加減で話すその少女は、後から来店したイエローを見てポカんと口を開けた。

その瞬間、レッドは気付いた。

一目惚れだ、と。

分かりやすい少女はその後すぐに髪を染め、眼鏡をやめた。

ファッション雑誌を食い入るように見つめ、馬鹿丁寧な言葉遣いも砕けた。

すべてはイエローの隣に並ぶ為、その思いだけで少女は変わった。

「可愛いな」

実に微笑ましい。

思わず口になると、ピンクは目を見開いて、ケーキを見るふりをして俯いた。

その頭をレッドは撫でる。

「嫌だ、やめて。子供みたいじゃない」

「うん。妹がいたらこんな感じかな？」

レッドがいたずらっぽく笑ってピンクの髪を乱した時。

「うああーっ!!」

聞こえたイエローの悲鳴。

レッドが顔を上げ、ピンクが振り向く。

そして二人は見た。

顔面、胸、脇、腹……まるで舞うように、鮮やかに繰り出されるパンチとキック。ファンタジーな生物にボコボコにされているイエローを。

「イエロー!!」

崩れ落ちたイエローにピンクが駆け寄る。

「わーい！ 勝ったでシ」

無邪気に喜び空中で踊るラッキー。

「おい……やりすぎだ」

レッドがカウンター内から出てきて言うと、ラッキーはケラケラと笑った。

「え？ そうでシか？」

「イエローの手足が曲がってはいけない方向に曲がっているような気がするが……気のせいか？」

「だって決闘でシよ。殺されなかっただけ感謝してほしいでシ」

「ラッキー……」

レッドがピンクの横にしゃがみ、ポケットから携帯電話を取り出す。

騒ぎは起こしたくないが、そんなことを言っている場合ではなさそうだ。

赤黒く変色して腫れあがった顔、ポロポロと口から床へこぼれる砕けた歯。

イエローは白目を剥き完全に意識を失って床に倒れている。

「救急車を呼ぼう」

ピンクの嗚咽が店内に響いた。

シルバー来店

「いやー、昨日は本当に死んだと思った」

イエローがゲラゲラと笑う。

「もう！ 笑い事じゃないよ！」

そんなイエローの背中をピンクは思い切り叩いた。

ラッキーとの『決闘』に敗れ、瀕死の重傷を負ったイエローだったが、今はその傷痕一つなく、まるであの怪我自体が幻であったかのようにピンピンしている。

「まあ、良かった……のか？」

レッドが苦笑しながらイエローの前に珈琲を置いた。

昨日、救急車を呼ぼうとしたレッドをラッキーは止めた。

そして『特別にラッキーが治療してやるでシ』と言って、イエローを引き摺って二階にある自室に籠もり、たった三十分程でイエローを元通りの姿に戻したのだった。

「おう！ 逆に調子がいいぐらいだ。なんか頭の中がスッキリしたと言っか」

「……そうか」

ラッキーが『なかなか面白いデータがとれたでシ』と腹を抱えて笑っていたことは黙っておこうとレッドは心に決めた。

「そういえば、ラッキーはいないの？」

ピンクが首を傾げて天井を指差す。

「ああ、それがいつの間にかいなくなってたんだ」

「そうなんだ」

「何かやらかしてなければいいんだが……」

黙っていなくなる辺りが実に怪しい。

レッドが溜息を吐いたその時。

「ただいまでシー」

カラカラというベルの音と共にドアが開き、ラッキーが店に入ってきた。

レッド、イエロー、ピンクの三人は入口を見たまま固まる。

ラッキーは一匹ではなく、人間を一人引き連れていた。

一目で高級と分かる、体にピッタリ合ったスーツを着た男。

少し長めの前髪を緩やかに後ろに流し、シルバーフレームの眼鏡を掛けた三十代前半と思われるその男は、不機嫌そうに眉間に皺を寄せている。

「ほら新入り、ボーっとしてないでそこら辺に座るでシ」

まさか、やはり……。

レッドは額に手を当て唸る。

ラッキーは新隊員を拉致してきたのだろう。

男はピンクの横に座り、持っていた鞆を隣の席に置いた。

「新入り、先輩方に挨拶するでシ」

男がラッキーを睨み付け渋々口を開く、が、それより先にイエローが声を発した。

「シルバーだ！ お前はシルバーだ！」

皆の注目がイエローに集まる。

イエローは男を指差し更に続けた。

「そのモデルばりの顔と長い手足！ お前は間違いなく『シルバー』だ！ 正規隊員でもなく、しかも途中から登場したにも関わらず、その甘いマスクとクールな言動でお母様方のハートをガッチリキャッチしていつの間にか主役のようになって……まさにお前はそんな感じだ！」

な？と同意を求められ、ピンクは少しだけ笑みを浮かべて首を傾げる。

レッドが溜息を吐いて興奮するイエローに「落ち着け」と言い、男に視線を移した。

「あー……、俺はレッド。宜しく。君も無理矢理魔具を体に埋め込まれて連れて来られたの……か？」

男が片眉を上げる。

「『君も』……と言うことは、あなたもそうなのですか？」

「ああ、俺達みんなそうだ」

男はフウッと息を吐き、緩やかに首を振った。

「あの緑色の生物が現れた途端、道端にいた子犬が化け物に変身して……、何がなんだか分からないうちに腕に怪しい金属を埋め込まれてしまったのです」

「あー、それはまあ、大変だったな。……珈琲飲むか？」

「はい」

レッドが戸棚からカップを取り出す。

イエローが身を乗り出して男に笑った。

「俺はイエロー。フリーターだ。こっちがピンク。高校生で俺の彼女」

「ちょっと待つでシ！ イエローは決闘に敗れたのでシから、ピンクちゃんはラッキーのものでシよ」

ラッキーの訴えを無視してイエローは続ける。

「宜しくな、シルバー」

男は軽く肩をすくめて諦めたように口角を上げた。

「私はここでは『シルバー』という名で決定なのですね。分かりました。宜しく」

「おう！ ちなみに仕事は何やってんだ？」

「会社員ですよ」

「エリートか？ いや、エリートだな」

レッドがイエローを窘めて、男　シルバーの前に珈琲を置く。

シルバーは一口珈琲を飲み、「ところで……」とラッキーに視線を移した。

「少々訊きたい事があるのですが」

ラッキーがフワフワと飛んできて、カウンターのの上に立つ。

「何でシか？」

シルバーは目を眇め、珈琲カップから手を離れた。

「まず、大人しい子犬がラッキーの姿を見た途端に化け物に変身したのは何故ですか？ 私は数分前に同じ道を通っていますが、その時あの子犬が変身することはなかった。あきらかにラッキーの姿を認めてあの子犬は変身していました。二点目は、ラッキーの世界のことです。それは具体的にどんな世界ですか？ そしてラッキーの『ご主人様』とはどんな人物で、魔獣達が異世界に逃げるといふ大事件の原因は何ですか？ 魔獣が自ら逃げたのか、それとも意図的に逃げた者がいるのか。ラッキーは私に『魔獣達が逃げた』と言いました。ではその『達』とは？ 魔獣以外にも『何か』が逃げたのですか？ 目撃者である私達をすぐに消さない点も気になります。魔獣の回収の手伝いと言いますが、本当にそれだけですか？ 私達の体に埋め込まれた魔具は、本当に爆発物なのか、だとすればどれくらいの範囲を巻き込むのか。そして何より……ラッキーの世界は魔法が発展した世界のようにですが、その強大な力を使ってこちらの世界を征服する計画があるのではないですか？」

一気に言っつて、シルバーはじつとラッキーを見つめる。

そのシルバーを、レッド、イエロー、ピンクの三人が啞然として見つめた。

「どうなんですか？」

シルバーに問われたラッキーは、ポリポリと頭を掻く。

「めんどくさい奴を捕まえたでシ。下僕のくせにあんまり生意気なことを言つと、ドカンじゃ済まないでシよ」

「……………」

シルバーが深く息を吐いて額に指を当てる。

イエローが感心して声を上げた。

「なんか、お前凄いな。やつぱ『シルバー』だ」

「……まさか、こんなあからさまに怪しいのに、私が言った事を今まで疑問に思わなかったのですか？」

「思わなかった」

「……………」

シルバーは馬鹿にした目でイエローを見て、それからピンクとレッドに視線を移す。

曖昧に笑うピンクとレッドの二人を見て、シルバーは頷いた。

「成る程」

ピンクもレッドも色々とおかしな点に気付いてはいたが、敢えて口に出していなかったのだろう。

レッドが咳払いをして笑う。

「まあ、あれだ。不運にも拉致され大変だとは思っけど、頑張っていこう」

「うん、そうだね」

イエローが珈琲カップを頭の上に持ち上げた。

「よし、新しい仲間に乾杯だ。人数増えて魔法戦隊らしくなってきたなあ！」

やたら元気なイエローと曖昧に笑うレッドとピンク、眉間に皺を寄せるシルバー、そしてそんな四人を蔑むような瞳で見つめるファンタジーな生き物。

微妙な空気の中、四人は新しい仲間を祝い、珈琲で乾杯をした。

最後の晚餐

平日の昼間。

レッドの喫茶店には当然のように客はなく、ラッキーが堂々とカウンターの座って手に持ったビーフジャーキーを眺めていた。

「ラッキー、早く食べよ」

レッドの声にラッキーは顔を上げる。

「あげるでシ」

「ん……？ 珍しいな。腹がいつぱいなのか？」

レッドはラッキーからビーフジャーキーを貰い、口に入れようとしてやめた。

そしてビーフジャーキーをじっと見つめる。

「……これは何肉だ？」

「先日採取したイエローの」

レッドが渾身の力でビーフジャーキーを投げた。

「冗談でシよ。魔獣の肉でシ」

「魔獣の肉でも食いたくはない！」

眉を寄せきつぱり言うレッドに、床に落ちた肉を拾いながらラッキーは呟くように言う。

「おかしいのでシ」

「ラッキーの頭の中が？」

「ドカンといくでシよ。そうではなくて、魔獣がでシ」

ラッキーがフワフワ飛んで来て、またカウンターの上に座った。

「変身前の魔獣がネズミに似ているって前に言ったでシよね」

「あー、そういえば」

「だけどシルバーと会った日、あの日見た魔獣は犬にそっくりだったでシ」

レッドが首を傾げ訊く。

「つまり？」

「つまり、こちらの世界に合わせて身体を変化させてるようですね」
ラッキーは溜息を吐いて肉をカウンターに置き、何処からともなく携帯ゲーム機を取り出した。

ゲーム機の画面には、地図と街の風景が映し出されている。

「変な反応があったから急いで行ってみれば、見たことない魔獣…
…参ったでシよ」

「ところでそのゲーム機は俺の物ではないのか？ しかも改造したな」

「レッドの物はラッキーの物でシ」

悪びれもなく言い切り、ラッキーは画面を見つめて「ん？」と首を傾げた。

「誰か来るでシよ」

「来る？」

「ほらでシ」

ラッキーが指差したドアが開く。

現れたのはヨレヨレのスーツを着た見知らぬ男。

レッドは目を見開き一瞬固まり、そして素早くラッキーを掴んでカウンター内に隠した。

「い、いらつしゃいませ」

歳は四十半ばくらい。

目は落ち窪み、風呂に入っていないのか髪がベツタリとして乱れ、椅子に座ると異臭が漂ってくる。

「ここ……やっぱ喫茶店だったのか……珈琲の香りがしたから…
…」

男は擦れた声で言い、「珈琲を……」と俯いて注文した。

「はい、少々お待ちください」

何だか怪しい雰囲気だが客のようだ。

客が来るなんて珍しい、と心のなかで呟きながら、戸棚からカップを出し珈琲を注ぐ。

空気を読まずにフワフワ浮こうとするラッキーを片手で押さえつけながら、レッドは男の前に珈琲を置いた。

「レッド！」

「うわっと、どうぞごゆっくり」

ラッキーの口を手で塞いでレッドは男に作り笑いを見せ、ダッシュで二階に行く。

部屋の中にラッキーを放り込み、自分も入って襖を閉めた。

「ラッキー！ 駄目だろ」

「魔獣でシ」

「何……？」

ラッキーがゲーム機の画面をレッドに見せる。

そこには犬が映っていた。

「ただの犬じゃないのか？」

「違うでシ。これはこないだ採取した魔獣のデータを元に作った最新の魔具でシ。間違いないでシ」

「最新の魔具って……だからそれ俺のゲーム機だろうが……」

溜息を吐いてレッドは部屋から出て行こうとした、が、ラッキーに腕を掴まれる。

「魔獣を捕まえに行くでシよ」

「え……？ 無理だ、客がいるのに留守にする訳にはいかない」

「逆らうとドカンといくでシよ」

レッドは参ったなと呟きながら、尻ポケットから携帯電話を取り出してどこかにかけた。

「ああ、イエロー。今魔獣が出たみたいなんだけど行けるか？ あ

ー、バイト中……ピンク……は授業中だよな。分かったまたな」
続けてレッドはまた電話をかける。

「あ、シルバー。今魔獣が出たみたいなんだけど……え？ 工作中、

これから会議……。うん、だよな。普通この時間は仕事で当たり前……悪かった、また暇な時にでも珈琲飲みに来てくれよ。じゃあな」
ポケットに携帯電話を戻しながらレッドは眉を寄せラッキーに告げた。

「悪いが無理だ。平日の昼間なんて、みんな仕事か学校だ」

「……………」

ラッキーがチツと舌打ちして窓の外を見る。

「使えない人間共め……………」

「おい、可愛いキャラを保て、何か怖いぞ。まあそういう訳だから今回は諦めろ」

「嫌でシよ。ラッキーだけで行くでシ。孤軍奮闘でシ」

「あ！ラッキー！」

ラッキーはギョントツと飛んで窓ガラスを砕いて出て行った。

残されたレッドが呆然と呟く。

「あいつ……、窓を開けるといふ選択はなかったのか？」

畳の上のガラスの破片に溜息を付き、レッドは片付けは後にして取り敢えず一階に下りる。

「こんな明るい時間に外に出て、騒ぎにならなきゃいいが……………」

カウンター内に戻ると、男はまだチビチビと珈琲を飲んでいた。

長く居そうな雰囲気だなど、レッドは椅子に座って雑誌を広げる。

ゆっくりと過ぎる時。

雑誌を読み終えたレッドが顔を上げた。

さすがにもうカップの中は空に近い筈、おかわりを勧める為に声を掛けようとして、そしてふと気付く。

手が……震えている？

カップを持つ男の手が小刻みに震えているではないか。

寒いということはない筈だ。

気になってじっと見ていると、男は珈琲を飲み干して立ち上がった。

「ありがとう、美味かった」

レッドがハツとして営業スタイルを浮かべる。

「あ、ありがとうございます」

男はポケットから皺くちゃの千円札を出してカウンターに置いた。そしてお釣りを用意しようとするレッドを制する。

「いいよ。取っというて」

「でも……」

「いや、ほんとに……僕にはもう必要のないものだから……」

「は？」

キョトンとするレッドの目を見て男は笑った。

「ほんとに……美味かった。……最後に……こんな美味しい珈琲が飲めて……嬉しいよ……」

話ながら、男の目から流れる涙。

呆然とするレッドから視線を外し、男は足早に出て行った。

「……………」

何だったのだ？

レッドは男が置いて行った千円札を見つめる。
変な客だった。

「『最後に』ってまるで……まるで？」

まるで 何だ？

よれよれのスーツ、ボサボサの頭、異臭、瘦けた頬、皺くちゃのお札……まるで、そう、人生に疲れてしまったような……。

「まさか！」

いや、そんなことはないだろうと否定しながら、レッドはカウンター内から飛び出し外に出る。

左右を見渡すが、男の姿は見えなかった。

「おいおい……嘘だろ?」

近くを捜し回っても男の姿はなく、仕方なく一旦レッドは店に戻る。

「こういう場合ってどうすればいいんだ? 警察に届け……いやいや、俺の思い過ごしかもしれないし……」

独り言を言いながら店の中を歩き回っていると、ちょうどそこにラッキーが帰って来た。

「ただいまでシー」

二階からフワフワ飛んでくるラッキーに、レッドは「そうだ!」と叫んで駆け寄る。

「おい! さっきのちよつと貸してくれ!」

ラッキーが首を傾げた。

「はひ? さっきのとは何でシか?」

「ゲーム機だよ!」

苛ついた様子のレッドにラッキーが鼻を鳴らす。

「そつやつて都合のいい時だけラッキーに擦り寄ってくるんでシね」

「いいから早く!」

「フン……、仕方ないでシね」

ブツブツ文句を言いながら、ラッキーは何処からともなくゲーム機を出した。

ひったくるようにレッドがゲーム機を手にする、が。

「……おい、何だこのヒビは」

ラッキーが両手を広げてヒラヒラ振る。

「さつき戦闘中に落として壊しちゃったでシ。なかなか手強い魔獣だったでシ」

「……………」

レッドは蹲り頭を抱えた。

海外出張

「突然ですが、明日から海外出張になりました」

午後六時。

レッドとイエローとピンク、それにラッキーがまったり過ごしている時に来たシルバーが、店に入るなりそう言い放った。

「……海外出張でシか？」

首を傾げて訊くラッキーに頷きながらカウンター席に座り、シルバーは眉を顰める。

「レッド、顔色が悪いですよ」

言われたレッドは苦笑して、シルバーの前に珈琲を置いた。

「ほら！ やっぱり体調が悪いんじゃないの？」

「え？ そうか？ こんなもんじゃねーの？」

ピンクとイエローが同時に言う。

「分かった、あれだろ？ グリーンデビルにこき使われて疲れてるんだろ？」

「イエロー失礼でシ！ ラッキーはそんなことしてないでシ！」

「嘘つけ！ 絶対そうだ。なあレッド」

レッドが少し笑って緩く首を横に振った。

「いや、まあ何と言うか……ラッキーとは別問題だ。直接は関係ないけどちよつと後味が悪い出来事があつて寝不足気味なんだ」

「救える命をみすみす逃したでシ」

「ラッキー……、それよりシルバー、海外出張つてどれくらい行くんだ？」

シルバーが眉を顰めたまま珈琲を一口飲み答える。

「レッドも色々大変そうですね。出張期間は長くて数週間です」

「すげー曖昧だな」

首を傾げながら訊くイエローにシルバーは頷いた。

「向こうでトラブルが起きて急に行かなくてはならなくなったので
ピンクが興味津々といった様子でシルバーに訊く。

「ねえねえ、何処に行くの？ あたし海外って行ったことないんだ。
いいなあ。イエローは行ったことある？」

「あ、俺も行ったことない。レッドは？」
「ない」

シルバーは苦笑してカップをテーブルに置いた。

「遊びに行くわけではないんです。それより」

シルバーがラッキーに視線を移す。

「この腕の魔具、搭乗検査で引つ掛かると思っているのですが」

左腕をポンポンと叩きながら言うシルバーにラッキーは「ああ、
それでシカ」と笑った。

「心配なら取り外すでシよ」

全員が「えっ！」と目を見開く。

「外せるのか？」

「そんな簡単に出るの？」

「マジか！ 俺も頼む」

「まさか『取り外す』と言うとは思いませんでした……」

ラッキーは心外だと唇を尖らせて短い腕を組んだ。

「皆しゃん、ラッキーを鬼か何かと勘違いしてまシね。ちゃあんと
個々の事情を考慮して対応出来るのでシよ。えーとそれでは外すで
シ」

皆が見守る中、ラッキーが右手を長い耳の中に入れて、クルリと
華麗にターンする。

「ぱらりらったらーん！ 魔具外し道具〜！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……ラッキー、何からツッコめばいい？」

ラッキーが首を傾げた。

「何がでシか？」

イエローがラッキーの頭を鷲掴みする。

「謝れ！ 青い猫に謝罪しろ！ たとえたくさんの人がパロっていても、お前はやってはいけない」

「違うでシ！ あちらは腹の異次元ポケットでシが、こちらは耳の異世界ポケットでシ！」

「違うぞグリーンデビル！ あれは四次元ポケットだ！」

揉める一人と一匹にレッドが溜息まじりに言った。

「問題はそこではないのでは？」

シルバーがレッドに同意する。

「そうですね。問題はラッキーがその手に持った斧で何をするつもりなのか、ですな」

「何をするつもりと言われてもでシねえ」

ブンツという音がして斧が振り下ろされる。

咄嗟に後ろに体を引いて、シルバーのスーツの肩から肘にかけてが斬られた。

「光った！ 斧が光った！ それ普通の斧じゃねえな？ だがそれどころじゃねえよ。大丈夫かシルバー！」

レッドがカウンター内から身を乗り出し、ピンクがシルバーの腕を掴んで傷がないか確認する。

「良かった。腕は切れてない」

ホツと息を吐き、ピンクは眉を寄せてラッキーに抗議した。

「ラッキー！ 危ないでしょ！」

ラッキーが頬を大きく膨らませて拗ねる。

「ええ〜？ だって魔具と腕はもう一体化しちゃってるんでシよ。取り外すには腕ごと斬り落とさないと駄目でシ」

「一体化……」

レッドが呟き、イエロー、ピンク、シルバーが愕然とする。

「大丈夫でシ。いい子にしてればドカンといくことはないでシ。それよりシルバー、取り外すでシか？」

シルバーはラッキーを睨み付けながら大きく首を横に振った。

「そんなに激しく見つめられたらドキドキするでシ。じゃあかわりにイエロー、取り外すでシか？」

「外さねえよ！」

「遠慮がちさんでシ〜」

斧を持ってクルクル踊るラッキーに溜息を吐きつつ、レッドが皆のカップの珈琲淹れなおす。

「まあ、取り敢えず落ちつこうか」

「うん、そうだね」

ピンクが大きく深呼吸をしてシルバーに微笑みかけた。

「海外いいなあ、行ってみたいな」

「あー、俺も！」

「……何事もなかったかのような態度、慣れてますね、皆さん」

啞然とするシルバーの肩をイエローが叩く。

「なあ、土産買ってきてくれよ」

「土産？」

「あたしブランドの小物がいいな」

「俺様もだ！」

「シルバー、出来ればカップを一つ買ってきてくれないか？ 店に出したいから」

「……………」

額に手を当て唸るシルバーの頭にラッキーがフワフワ飛んで行き乗った。

「ピンクちゃん、ブランド物が欲しいなら、ラッキーがあちらの世界の最新モデルをあげまシよ。ていうか海外に行きたいならあちらの世界に遊びに行くのはどうでシか？」

「え？」

ピンクの顔が引きつる。

「うーん、異世界旅行はちょっと……」

「温泉もあるでシよ」

「ごめんね。いきなり異世界はハードル高いかな？ ……帰って来れなくなったら嫌だし」

「ええ？ 一緒に行こうでシよ」

頭の上で暴れるラッキーに眉を寄せて、シルバーが頭を振って立ち上がった。

「うわ！ でシ」

落ちたラッキーがわざとらしくピンクの胸に倒れ込む。

「帰ります」

カウンターの上に千円札を置いてドアに向かって歩き出したシルバーにレッド達が声をかけた。

「ブランド小物」

「同じく」

「カップを出来れば……」

「美味しい食べ物も山盛りでシ！」

「……………」

シルバーは振り向かずに行って行く。

「うーん、買ってきてくれるかな？」

「大丈夫、金持ってるさだしな！」

「あのスーツも高かったんだろうな、ラッキー、今度謝っておけよ」

「主人が下僕に謝るなんておかしいでシ。それよりお腹が空いたでシ！」

「じゃあメシにするか……、とレッドがキッチンスペースに行き、ピンクとイエローはラッキーに邪魔されながらもこれから何処に遊びに行くかを相談した。」

ブルー来店

レッドの経営する喫茶店は営業時間が決まっていない。

朝は起きたら開けるし、夜は眠くなれば閉める。客　　と言って
もイエロー達だが　　がいれば遅くまで開けていることもある。

そして今日はもう十時を過ぎていたが、バイト帰りのイエローが
マンガ雑誌を読みながら食事をしているので、まだ喫茶店は開いて
いた。

「マンガに出てくる肉って、どうしてこつも美味しそうなんだ？」

イエローの質問にレッドは小さなあくびをしてから答える。

「美味しそうに描く努力を作者がしているからではないか？」

「食ってみたいな、マンガ肉」

「無茶言うな、俺は作れない………というかそんなでかい骨付き肉、
こちらの世界には存在しないと思うぞ」

「簡単に否定するな、世界中探せばあるかもしれないだろ。夢と口
マンを求めて冒険してこそ男だろう」

くだらない会話をしていると、入り口のドアが開いた。

「ただいまでシ〜」

ラッキーの声に振り向いたレッドは『おかえり』と言いかけてそ
のまま目を見開き固まる。何故ならラッキーは一人ではなかったか
らだ。

ヨレヨレのスーツを着た見覚えのある男　　。

それは以前、この喫茶店にて珈琲を飲んで涙を流して去っていつ

た、人生に疲れた様子の男と同一人物だった。

「ん？ なんだ、また拉致つてきたのか？」

眉を寄せて首を傾げるイエローにラッキーは心外だと首を振る。

「ラッキーを人攫いみたいに言うなでシ。レッドが気にしていたからわざわざ捜してやったんでシよ」

「レッドが？」

イエローが振り向くと、レッドは大きく息を吐いて少しだけ笑った。

「良かった、俺はてつきり最悪の結果になったのかと」

「森で遊んでいるところを捕獲したでシ」

「グッジョブ、ラッキー」

何で遊んでいたかは訊いてはいけない。

男が手にしているロープも見えないことにすると、レッドは男にイエローの隣の席に座るよう勧めた。

「俺はレッド。こつちがイエロー、ラッキーに巻き込まれた仲間です。何があつたかは知らないけれど、俺達も結構な不幸の中頑張っている。その、まあ、そのうちいいこともありますよ」

「曖昧な言葉でいい加減なことを言う。人間は残酷な生き物でシね」

「ラッキー！」

レッドが慌ててフワフワ飛ぶラッキーを捕まえて口を塞ぐ。

変に刺激してまた森に行かなくてもしたら困ると思いつながら男を見ると、意外にも苦笑していたのでホツと胸を撫で下ろした。

「珈琲、飲みますか？」

頷いたので、レッドは男の目の前に珈琲を置く。

男はロープをカウンターのの上に無造作に置き、両手でカップを包み込むようにして持った。

「ああ、またこの珈琲が飲めるなんて思わなかった」

感慨深げに呟き、目を閉じて珈琲の香りを嗅ぐ男。

どこことなく幸せそうな気配すら漂う様子にレッドが大丈夫そうだ

と安心した時、イエローがサラッと男に訊いた。

「おっさん人生にお疲れみたいだけど、何があつたんだ？」

……余計なことを。

レッドの顔が強張る。

過去はそつとしてお帰りいただくかと思っていたのに、イエローの一言で台無しになった。

「……………」

言わなくていい。絶対重すぎるだろうから。

レッドの願いも虚しく、男は溜息を一つ吐いてカップを置くと、少しだけ口角を上げて語り始めた。

「良くある話ですよ。ある日会社が無くなってしまっていてね、次の就職先も決まらない。僕には妻と小学生の娘がいるんですが、僅かな金の入った貯金通帳を持って出て行ってしまいました。それでも就職が決まれば家族は戻ってくると思っていたのですが、この不況では見つからず……焦りから少しおかしな行動をしてみました」

イエローが眉を寄せ、うんうんと頷く。

「そりゃ大変だったな」

男は首を横に振り笑った。

「はい。でももう大丈夫です。ラッキー様に救っていただきましたから」

ん？ とレッドとイエローが顔を見合わせる。

「ラッキー……様？」

「ラッキー様は、こんな私にやり直すチャンスを与えてくださいました。この付近に潜伏している魔獣を一匹捕まえれば十万エクレア、その上すべてが終わった暁にはあちらの世界で高官に取り立ててくださるのです」

恍惚とした表情で語る男に、レッドとイエローはゾクリとした。

全然大丈夫ではない。あきらかにまだ病んでいる。

人生をどう生きるかはその人次第ではあるが、異世界でやり直すという発想は危険なのではないか。

「おっさん……、グリーンデビル　その異世界生物に騙されてるぞ」

イエローの忠告に、男は眉を顰めた。

「そんなことはありません、これでまた家族一緒に暮らすことができます。ラッキー様は僕の救世主です。頑張って魔獣を捕まえて、エクレアを貯めなくてはい！」

拳を握って力説する男。

その様子に若干引きつつ、レッドは先程から出てくる言葉に疑問を感じる。

「エクレア？」

あのお菓子のエクレアのことではなさそうだが……。

その質問には男ではなくラッキーが答えた。

「『エクレア』とは、あちらの世界の通貨単位でシ。一エクレアは約一円と考えるでシ」

「……美味しそうな通貨単位だな」

レッドは溜息を吐いて男の目を覗き込んだ。

「いろいろあつて大変だったとは思っけど、でもやっぱりこちらの世界から離れるのはやめたほうがいいんじゃないですか？　二度と帰って来れないかもしれないですよ」

しかしレッドの忠告は男に届かない。

「別にこちらの世界に未練はありません。あちらで出世して、苦勞をかけた家族にも楽しい毎日を送らせてやりたいです」

「家族……連れて行く気満々ですね」

魔獣がいる怪しい世界など嫌がられると思うが。

「早くあちらの世界に行けるように、あなた方も協力してください。お願いします」

カウンターに額をつけて、男はレッドとイエローに頼んだ。

「……………」
「……………」

レッドが頭に手を当てて小さく首を振り、イエローが男の肩に手を置く。

「ブルー。おっさんはブルーだ」

痛々しくて、見ている側の心が沈む。

「早く目を覚まそうな」

イエローがポンポンと男改めブルーの肩を叩く。

こうしてまた一人、『魔術戦隊』に隊員が増えたのだった。

五人揃って……何レンジャー？

「変質者！」

店に入るなり、ピンクはカウンター席に座るブルーを指差し叫んだ。

ブルーが目を見開き、レッドが息を呑む。

「レッド！ この人」

何ということだ。更に無意識の暴力を続けようとするピンクを、レッドが手で制した。

「あー……ピンク……、こちらは新隊員のブルーだ。イエローから聞いてないか？」

確かに怪しい雰囲気はするが……という言葉を飲み込み、レッドがブルーをちらちら見ながら言いにくそうに告げる。

「新隊員？ え？ この人が？」

ポカンと口を開けて立ち尽くすピンクに、レッドは椅子に座るよう促した。

戸惑いつつブルーの横に座りながら、ピンクが会釈する。

「あの……ごめんなさい」

自嘲的な笑と共に、ブルーは首を振った。

「いえ、こんな身なりじゃ間違えられても仕方がないです。はじめまして、ブルーです」

「は、はじめまして。ピンクです。本当にごめんなさい。以前この近くに居た変質者っぽい男にちょっとだけ似てたから、間違えちゃって……」

おそらくピンクが以前見たという『変質者っぽい男』はブルー本人だろうが、レッドはあえて指摘せずに、ピンクに注文を訊いた。

「何にする？」

「珈琲。あ、シナモンをトッピングして」

「ん。分かった」

棚からカップを出し、レッドが珈琲を注ぐ。

「ああ、そうだ。チーズケーキがあったんだ。食べるか？」

「うん」

ピンクが頷いたので冷蔵庫を開け　レッドは眉を顰めた。

「無い」

何故無いのか。考えられる原因は一つ。レッドは二階に向かって叫ぶ。

「ラッキー！」

すぐに間の抜けた返事がして、ラッキーがフワフワと飛んできた。

「ふぁーい。あ、ピンクしゃん。いらっしやいでシ」

「『いらっしやい』じゃない。チーズケーキ食べたのはラッキーだろ？　朝も昼もおやつもたっぷり食べたのに、何で更に盗み食いまでするんだ？」

ラッキーは鼻を鳴らして、ピンクの前に着地する。

「盗み食い？　人間が悪いでシ。お腹が空いから食べただけでシ」

レッドが大きな溜息を吐いて、冷蔵庫の扉を閉めた。

「ごめん、ピンク」

「いいよ。また今度で」

ピンクが苦笑したその時　カラカラというベルの音と共に、入り口のドアが開く。

「あれ？　イエロー……とシルバーじゃない！　日本に帰ってきたんだ」

現れたのはいつものようにちゃらちゃらとした格好で大きな紙袋を持ったイエローと、ビシツとスーツを着こなしたシルバーだった。

「おかえりシルバー。イエローと一緒になんだな」

「おう！　そこで偶然会った」

シルバーではなくイエローが上機嫌に答える。

「で、その荷物は何だ？」

首を傾げるレッドに、イエローがニツと笑ってカウンターの上に

紙袋を置いた。

「シルバーからの土産だ」

「え！ 嘘、本当に買ってきてくれたの？」

「カップも？」

「食べ物でシー！」

「待て待て、俺様が先だ」

わつと群がり袋の中を物色するレッド達。その光景を冷めた目で見ながら、シルバーはブルーに近付いた。

「はじめまして、シルバーです。あなたがブルーですか？」

「はい。はじめまして」

シルバーの身なりを上から下まで素早く見て、ブルーは自分のヨレヨレのスーツの胸元を握り締めて俯き加減に答える。

そんなブルーの態度に片眉を上げ、シルバーは椅子に座った。

「レッド、珈琲をお願いします」

シルバーに言われたレッドが振り向いて笑う。

「ああ、ごめん。すぐ用意するよ。ブルーもおかわりしますか？」

「いや、僕は……その……」

レッドは「ああ……」と気付き、棚から出したカップに珈琲を注いでシルバーの前に置き、ブルーのカップにも珈琲を注いだ。

「うちの店は、おかわりはサービスですから」

二杯分の料金を払う金銭的余裕は無いのだろう。さりげなく、シルバーからの土産の菓子も開けてブルーの前に置く。

それに手を伸ばしてちびちび食べるブルー。その姿に何故かホツとし、そのまま視線を横に移して、レッドはギョツとした。

シルバーが眉を寄せ、あからさまに不快な表情をしている。

「シ、シルバー」

侮蔑の含まれた視線は、あまりにも失礼。
レッドが思わず声を掛けた時、横から紙袋が現れた。

「ほい、ブルー」

イエローに紙袋を押し付けられ、ブルーが戸惑う。

「これはブルーの取り分だ。俺たちみんなもう貰ったから」

「いえ、でも……」

「いいよな、シルバー」

シルバーはチラリとイエローを見て、「どうぞ」と答えた。

「あ、ありがとうございます……」

紙袋を抱えて頭を下げるブルーの背中をイエローが叩く。

「ブルーは一番年上なんだから、そんな馬鹿丁寧な言葉遣いやめろ

よ」

「え？ でも……」

「『でも』じゃねえ」

ブルーが周りを見回す。レッドが頷いた。

「そうだな。いいと思いますよ」

「そう、かな。じゃあ僕への敬語もなしで」

「敬語とか、問題はそこじゃないような気がしますか？」

不意に聞こえた言葉にレッドとピンクの動きが止まり、イエローが首を傾げる。ラッキーだけは土産の菓子を頬張っていた。

「何だ？ グリーンデビルに洗脳されてることか？」

イエローの問いに、シルバーが眉を顰めてブルーを見つめる。

「……洗脳までされているのですか？」

「あ、まだ言っただけだったか？ 洗脳されてるぞ」

とんでもないと首を振り否定するブルーを無視し、二人は会話する。

「どのように?」

「崇拜系」

「ああ……。やっかいな」

「まあ、そう言うなって。これも縁だ。それに 気付かないか?」
シルバーが首を傾げた。

「何に?」

「なんだ、鈍い。お前らは?」

視線を向けられて、レッドとピンクが首を振る。

イエローは両手を広げ、大袈裟に溜息を吐いた。

「おいおい、それでもお前達マジか? つまり……」

コホンと咳払いして、イエローは重大な事実を発表した。

「隊員が五人集まったんだよ! 戦隊モノの必要最小人数だ! そ
う、俺たちは、五人揃って『魔術戦隊』」

そこでイエローが固まり、レッドの方を振り向く。

「おい……。俺達、何レンジャーだ……?」

レッドが「え?」と声をあげた。

「何レンジャーって言われても……」

「しまった、考えてなかった」

イエローが唸り、顎に手を当てる。

「なあ、ピンクは何レンジャーだと思う?」

「え?」

ピンクは戸惑い手を振った。

「あたし、戦隊モノって興味なかったし、良く分かんない」

「じゃあシルバー」

「私も興味ないです」

イエローが腕を組み、益々唸る。

「『ラッキーレンジャー』でいいんじゃないでシか?」

菓子を食べ終えて会話に参加したラッキーに、イエローが鼻を鳴らした。

「それだけありえねえ」

「なんででシか！」

「あ、ブルーはなんかあるか？」

訊かれたブルーが頷く。

「僕は『ラッキー様レンジャー』でいいと思うけど……」

「ラッキー……『様』かよ」

イエローは呟き、何となく勢いがそがれて椅子に座った。

レッドがコホンと咳払いする。

「まあ、イエロー。とりあえず『魔術戦隊』だけでいいんじゃないのか？ 何レンジャーかは追々考えるってことで」

「……そうだな」

レッドの意見に同意し、イエローは大きく深呼吸をして、気を取り直すように元気に拳を振り上げた。

「よし、じゃあ先に『決め台詞』から考えるか！」

子供心を忘れない男 その名もイエロー。

周囲の微妙な空気も跳ね除け、嬉々としてかっこいい決め台詞について語り始めた。

決め台詞を考えよう

「決め台詞って言われてもなあ……」

首を傾げるレッドに、イエローは眉を寄せた。

「なんだなんだ、ノリが悪い。大切だぞ、決め台詞は」

「そうか？」

「そうだ！」

イエローは親指で自分を指して口角を上げる。

「たとえば俺なら……そうだな、『孤高の鳳凰』とかか？」

「孤高の鳳凰？ どういう意味だ？」

「知らん！ こういうのは何となく雰囲気を決めるもんだ」

「じゃあラッキーは『戦隊の可愛いマスコット』でシね」

イエローが目の前に飛んできたラッキーを手で払う。

突き飛ばされたラッキーを受け止め、ピンクが首を傾げて言った。

「でもさあ、決め台詞って要するに自己紹介なんですよ？ だった

らもつと分かりやすくしないといけないんじゃないかな」

「分かりやすく？」

振り向いたイエローにピンクは頷く。

「たとえば、レッドだったら『喫茶店のマスター』とか」

「そのまんまじゃねーか。せめて『潰れかけの喫茶店のマスター』

にしたほうがいいんじゃないの？」

イエローの辛辣な言葉に、レッドが顔を顰めた。

「おい、なんてことを言うんだ。それならお前は『ふらふらしているフリーター』だろうが」

「なんだと！ フリーターを馬鹿にするのか！？」

ピンクが「まあまあ」とイエローを宥め、先程から静かに珈琲を飲んでいるシルバーに話しかける。

「シルバーはどんなのがいいかな？」

シルバーが振り向く。しかしそれに答えたのはイエローだった。

「そりゃシルバーは『戦隊のパトロン』で決まりだろう。金持ってそっちな」

「……誰がパトロンですか。お金なんて出しませんよ」

あからさまに嫌そうな顔をするシルバーの肩をイエローが叩く。

「気前良く活動資金を出してくれ」

「嫌ですよ」

シルバーがイエローの手を振り払った。

「まあ、そう言わずに」

しつこく絡むイエローと嫌がるシルバー。

それを見ながら、レッドが溜息交じりに口を挟んだ。

「シルバー……」

全員の視線がレッドに集まる。

「もし本当にお金に余裕があるなら、少しでいいから援助してこないか？ ラッキーの食費が凄まじくて、実はかなり厳しい状況にあるんだ」

「食費？」

胡散臭げに目を眇めるシルバーにレッドは頷いてラッキーを指差した。

「失礼でシね！ ラッキーはちよっぴり食欲旺盛なだけでシ！」

「毎日毎日、俺の五倍は食ってて何を言う」

シルバーは「ふうん」と軽く首を傾げ、カウンターに肘を付く。

「だったら私だけではなく、皆から平等に金を取ればいいのではないですか？」

シルバーのもっともな発言に、レッドは眉を寄せた。

「まあそりゃそっだが……」

ピンクがラッキーをギュッと抱きしめて呟く。

「あたし学生だし、バイト禁止だし、お小遣いだってそんなに多くないから少ししか出せない」

レッドは手を振って苦笑した。

「いいよ、ピンクは」

イエローが腕組をして唸る。

「うーん、そうだなあ。俺も今月のバイト代はもうほぼ無いしなあ」

「イエローは無駄遣いをやめろ」

レッドが溜息を吐いた時、それまで完璧に気配を消していたブルーが口を開いた。

「ラッキー様の食費。分かった用意しよう」

全員が「ん!？」と振り返る。

「おいおい、ブルーのおっさんは一番金持ってねーだろ?」

「ああ。でもあちらの世界に移住するまでの生活費も要るし、頑張つて職を探すよ」

「やっぱ移住する気なのかよ……」

ブルーは強く頷いた。

「勿論だ。あちらの世界に行ったら豪邸に住んで贅沢三昧をする。それが僕の夢だ」

「豪邸ねえ……。ん? あれ? ブルーはいまどこに住んでるんだ?」

イエローの質問にレッドが慌てる。

「おいイエロー、そんなプライベートなことをズケズケ訊くな!」
しかしブルーは笑って答えた。

「ああ、ラッキー様が創ってくださった空間に住んでいる」

レッドとピンクが目を見開き、シルバーが眉を顰める。そしてイエローは首を傾げた。

「空間？」

「ああ。ほら、僕がここに初めて来た時、ロープを持っていたらうっ？」

イエローは記憶を辿ってそれを思い出し頷いた。

「あー、持ってたな」

「僕はそのロープで山の中にツリーハウスを作って、ひっそり暮らすつもりだったんだけど……」

「ツリーハウス!？」

レッドの大声にイエローとブルーが驚く。

「そうだけど……?」

「そ、そうか。いや、なんでもない」

あのロープを見て別の想像をしていたレッドは、ぎこちなく目を逸らした。

「しかし、ツリーハウスとは。わんぱくすぎるぜブルー!」

ブルーの肩をバンバン叩くイエロー。

そんな中、シルバーが鼻を鳴らしてピンクに抱かれているラッキキに視線を移す。

「『空間』とは？」

ラッキキは首を傾げて尻尾を振った。

「んん？ ブルーが住むところが無いっていうから創ったでシよ。

ピンクちゃん、ラッキキって親切ない子でシよね？」

訊かれたピンクが曖昧に笑う。

「うーん、そう、かな。でも空間ってどんなところなの?」

「良かったらピンクちゃんにも創ってあげるでシよ」

「え!？ あたしはいいよ!」

激しく手を振るピンク。そんなピンクにブルーがうっとりとした表情で言った。

「いいところだよ。どこまでも続く真っ白な世界と素敵な音楽」

「音楽？」

「ああ。何を言っているかは分からないが、こう、脳に直接響くような感じがして、益々ラッキー様に感謝したくなるんだ」

「感謝……」

ピンクがゆっくりラッキーを見下ろし、イエローが立ち上がる。

レッドとシルバーはラッキーをじっと見た。

「おいグリーンデビル、なんか怪しいことブルーにやってるだろう」
長い耳を掴まれて持ち上げられたラッキーが、イエローの顔を蹴る。

「失礼でシ！ 何もやってないでシよ！」

「嘘付け！」

「そんなことより決め台詞を考えるんじゃないかなかったでシか？」

「……………！」

イエローがハツとした。

「そういえばそうだったな。レッドとシルバーはもう決まってるから……………」

レッドが溜息を吐く。

「イエロー、もう決め台詞はいいんじゃないか？」

それよりもっと重大な問題が発生しているような気がするが……とブルーをちらりと見るレッドにイエローがきっぱりと言う。

「いや、やはり決め台詞は必要だ。よし、今から真剣に考えるぞ！」

イエローはラッキーをポイと捨て、腕組みをして唸った。

そして三十分後。

「うん、出来たな。じゃあ一度通しでやってみるか」

イエローの言葉にレッドはうんざりとした顔をした。

「もういいだろ？ イエローだけやれよ」

「駄目だ！ 俺たちは五人揃って魔術戦隊だからな。じゃあレッドから」

「……………」
フウッと息を吐き、レッドは渋々口を開いた。

「珈琲は美味いが客は来ない。潰れかけの珈琲店のマスター、レッド」

「自由を求めて放浪中！フリーターのイエロー！」

「魔術戦隊の紅一点。進路に悩む女子高生、ピンク」

「パトロン、シルバー」

「絶望からの新たな旅立ち。異世界移住希望、ブルー」

「戦隊のマスコット。しかしてその実態は、天才発明家にして戦隊の司令官、ラッキーでシ！」

「おい！誰が司令官だ！？」

イエローが伸ばした手をラッキーが叩く。

「ラッキーはどう考えても司令官でシよ！」

揉める一人と一匹を眺めながら、ピンクが呟いた。

「うーん、微妙」

レッドが苦笑する。

本格的な喧嘩になり始めたイエローとラッキーを止めようとしたブルーが、とぼちちりを受けて殴られ、シルバーが立ち上がり、紙幣を一枚置いて店から出て行く。

「あ、ねえレッド、万札だよ」

「え？本当だ。援助してくれる気なのか？ なんだか悪いなあ。でもありがたい」

「あたしも高校卒業したら、バイトしてお金入れるね」

「ありがとう。でもそれまでにラッキーがあちらの世界に帰ってくるのが一番いいんだけどな」

「あ、そうだね！」

レッドとピンクは顔を見合わせ、クスクスと笑った。

安定

「職安というのは、職業を安定させる場所ではないのだろうか？」

「……は？」

ブルーの呟きに、レッドがポカンと口を開ける。

夜の九時。

レッドの喫茶店には、ブルーとシルバーの二人が来店していた。

「どうして職が見付からないのだろうか？」

疲れきった表情で珈琲を見つめるブルーに、レッドは困った様子で眉を寄せて答えた。

「それは不況だから……」

「面接に行っても不採用になるのはどうしてなのだろうか？」

「まあ、運が無かったんだろう」

ブルーは溜息を吐いて珈琲を啜る。

「運が無い、か。会社が倒産した時にも言われたな」

自嘲するブルー。痛ましいその姿に、レッドは掛ける言葉が見付からない。

もし喫茶店の経営が苦しくなったらブルーを雇うことも出来たのだが、生憎今はレッド自身も余裕が無かった。

「僕は運が無いんだ……」

両手で顔を覆い、ブルーが呻く。出会った頃からすれば少しだけ肉が付いた気もするが、まだまだ細い体が震えた。

レッドがそつとその肩に触れようとしたその時、横から同情の欠片も感じられない言葉が投げかけられた。

「運が無い？ それは違うのではないですか？」

レッドがハツとして振り向き、ブルーが顔を上げる。

すると、シルバーが完全に馬鹿にした目つきでブルーを見ていた。
「私が面接官なら、ブルーのような方は絶対に採用しません」
辛辣な意見にレッドが眉を寄せる。

「おい、シルバー」

「まずその身なりでアウトですね」

ブルーの視線が彷徨った。

「でも、僕はこれしか持ってないから……」

「クリーニングに出すことくらいは出来るでしょう？ 髪だっても
つと整えられるはずですよ」

ブルーが言葉に詰まり、レッドが「まあ待て」とシルバーを手で
制する。しかしシルバーの話は続いた。

「職が見つからないのなら、取り敢えずイエローのようにバイトを
しようとは思わないのですか？」

「それは僕だつて分かっているよ。だけどバイトだつて今は厳しく
てなかなか雇ってもらえないんだ。シルバーは」

ブルーは拳を握り締め、真っ直ぐシルバーを見つめる。

「シルバーは自分がお金持ちで困っていないから、現実の惨さ
を分かっているんだ！」

ドンツと拳がカウンターに叩きつけられ、珈琲が揺れた。

肩で息をするブルー。シルバーが片眉を上げて鼻を鳴らした。

「いますよ、うちの社にも。あなたのように努力も無しに文句ばかり
言う者が」

「今は努力している！」

「どこがですか？ それにあなた、確か家族がいるのでしょうか？」

異世界生物の為にはなく家族の為に頑張ろうとは思わないのです
か？」

「だから！ ラッキー様に認められ、家族を連れてあちらの世界に
行って、苦勞かけた分まで贅沢をさせてやろうとしているんじゃないな

いか！」

シルバーが頬杖をつく。

「そもそもその考えが間違っているでしょう？」

「間違つてなどいない！ 僕はチャンスに賭けているんだ！ さっきからシルバーの意見は酷すぎる。僕は年長者だぞ。君みたいな若い者に意見されたくない！」

またブルーがカウンターを叩く。ふう……とシルバーは溜息を吐いて首を小さく振った。

「ああ、やはりそうですか。自分の無能を棚に上げて、『若造が偉そうに』、『親の七光りのくせに』と言つのですね。私はあなた方の何倍も努力していますよ。グダグダ言う前に結果を見せたらどうですか？」

「それは　！」

睨み合う二人。

「……………」

ブルーが唇を噛みしめて立ち上がる。

「レッド、今日は帰るよ」

そしてブルーは出口とは反対方向の壁に向かった。

「ブルー…………？」

心配そうに声を掛けるレッドをブルーは振り向かない。そして。

ブルーの胸から迸る光線。

驚くレッドとシルバー。

光線は空間を縦に切り裂き、その裂け目の中へとブルーは入っていった。

「……………」

「……………」

「………… 八八。これが『空間』か」

ラッキーが創ったと言っていたブルーの住処。

光も裂け目もブルーも、今はまるで幻のように消えている。

「異空間に住んでブルーは大丈夫なのか？」

「……さあ、どうでしょう？ でも何かあっても自己責任でいいのではないですか？」

「……………」

レッドが眉を寄せて溜息を吐いた。

「シルバー、言いすぎだ」

「そんなことはありません」

「シルバー……………」

シルバーは温くなった珈琲を一口飲んで、レッドを見上げる。

「ああいう口だけの者が一番嫌いです」

「ブルーにはブルーの事情がある。応援してやればいいだろう？」

俺達一応仲間なんだから て、偉そうに言っても、俺も人のこと心配している余裕は無いんだけどな」

自嘲するレッド。シルバーが訊く。

「経営はかなり厳しいのですか？」

「まあ………… そうだな」

「珈琲は美味しいと思いますよ。ただ、入りにくいですね」

レッドが頷いた。

「そうだよなあ。分かってはいるんだが…………。貯金はたいて借金まですて夢だった喫茶店をオープンさせたのに」

「そうなのですか？」

「ああ。少しずつ自分で修繕して、お客様が安らぐ店を作ろうとした矢先にラッキーと出会ってしまったんだ。お客様に来てはほしいが、ラッキーの存在がバテて大騒ぎになるのは困るし…………その上ラッキーの食欲は底無しときている」

シルバーが店内を見回す。外装と違い、中は清潔で綺麗にしてあり、はつきり言って勿体無い。

「それでこの状況ですか」

レッドはポットを手にして、シルバーのカップに珈琲を注いだ。

「この先、どうするかなあ」

安定した生活は、いつ手に入るのだろうか？

レッドが遠い目をし、シルバーがカップを口へと運んだ。

バトルハート来店

目の前に立つ小さな女の子に、レッドは固まった。

大きな瞳、肩より少しだけ長い髪。子供に人気のブランドの服に、ピンクのポシェットを斜め掛けしている。

「こんにちは！ 『バトルハート』です！」

女の子はにっこりと笑って言った。

頬に小さなえくぼが出来て、実に可愛い。

バトルハート……。

レッドが女の子を見つめながら、ギクシャクとカウンター内から出る。

「ええと、お嬢ちゃんは何歳かな？」

「七歳だよ」

七歳……。

「ラッキー！」

レッドはフワフワと浮いているラッキーを掴んで怒鳴りつけた。

「こんな小さな子を拉致りやがって！」

ラッキーがとんでもないと首を振る。

「違うでシよ。この子は自ら付いてきたでシ」

「嘘を吐くな！」

「酷いでシ。濡れ衣でシ」

わざとらしい悲しみの表情を浮かべるラッキーをポイと投げ、レッドはしゃがんで女の子と視線を合わせた。

「お嬢ちゃん」

「バトルハートだよ！」

「バトルハート？ それは」

何かと尋ねようとした時、背後から声がした。

「『美少女魔女！ プリン・ハート』の主人公、バトルハートだよね」

レッドが驚き後ろを振り返る。

「ブルー、いつの間に……」

いつものくたびれたスーツ姿でブルーが立っていた。どうやらあの怪しい空間から、直接店内に入ってきたようだ。

ブルーは女の子をじっと見て、泣きそうな笑顔を浮かべる。

「うちの娘も好きだった。真美^{まみ}、元気にしているだろうか？」

指先で涙を拭うブルー！

レッドは視線を女の子に戻して困った顔をした。

「あー……そっか。そのバトルハートってキャラになれるってラッキーに言われたんだな？ 残念だけどそれは嘘なんだ」

先程投げられたラッキーがビュンと飛んで帰ってきて抗議した。

「ラッキーは嘘なんて吐いてないでシよ」

「嘘だろっ！」

もう一度ラッキーを掴んで投げようとするレッド。

そのレッドの腕を女の子は掴んだ。

「待って！ ラッキーちゃんは嘔吐きじゃないよ」

「え？」

「見ててね」

訝しげなレッドに笑い、女の子が少し後ろに下がる。

そしてプレスレットをはめた左腕を頭上に掲げた。

「チェンジハート！」

ブレスレットが光る。

洋服が消えて一瞬全裸のシルエツトが見え、すぐに現れた大きなピンクのハートに女の子の全身が包まれた。そして。

「正義と勇気の美少女魔女、バトルハート！ 邪悪な心はプリリンしちゃうぞー！」

ピンクと白のフリルがたっぷりの戦闘服を着た女の子が、拳を突き出すポーズを決める。

啞然とするレッド。

「……………」

女の子を頭から爪先まで何度も見て、ラッキーに視線を移した。

「おいラッキー、何だこれは？」

「そうでシねえ。『プリリンする』って何でシかね。こちらの世界の言葉は難しいでシ」

「そうじゃなくて」

「なかなかの出来栄えでシ。やっぱりラッキーは天才でシ」

レッドがラッキーの尻尾を掴む。

「なに余計なもん作ってんだよ！」

ラッキーを思いきり投げ飛ばし、レッドは女の子に引きつった笑顔を見せた。

「えーと、バトルハート？」

女の子が首を傾げる。

「何？」

レッドは咳払いを一つして、女の子に手を差し出した。

「そのブレスレットをくれないか？」

「何で？ お兄ちゃんもチェンジしたいの？」

「いや、そうじゃないけど……」

どう言えば納得してくれるのか。レッドはゆっくりと言い含めるように話し始めた。

「こついうのがみんなにバレるとマズイというか、大騒ぎになっちゃうんだ。だからお兄さんが預かっておくよ」

女の子がキョトンとして、それから満面の笑みを浮かべる。

「なーんだ、そういうことか。だったら大丈夫！ バトルハートの正体はちゃんと秘密にするよ」

「……………」

レッドは頭を掻き篦り、真剣な顔で女の子を見つめた。

「それに、こんな怪しいもの持っていたら、お母さんが心配するよ」

「ママ？」

「そう、ママ」

頷くレッドに、女の子は何でもないことのように言った。

「心配なんてしないよ」

「え？」

「だっていつもお家にいないもん。夜はお仕事で、昼間は彼氏のところに行ってるからね」

「……………」

彼氏……、子供を置いて。

「あー……、お父さんは？」

「誰か分からない」

「……………」

これはまた、少々複雑な事情のある子のようだ。

額に手を当てて俯くレッドの後ろから、ブルーが女の子に話しかける。

「ご飯はどうしてるんだい？」

「そんなのコンビニもあるし」

「まさか毎日コンビニ弁当？」

驚くブルーに女の子は笑った。

「大丈夫だよ、バトルハートは強いから。それにこれからはお兄ちゃんがご飯を作ってくれるんでしょ？」

レッドが「えー!?」と顔を上げる。

「だってラッキーちゃんが『便利な使い魔』をくれるって言ったもん」

「使い魔……?」

「あ、そうだ」

女の子はレッドに小さな手を差し出した。

「エクレアちょうだい」

「エクレア?」

「ラッキーちゃんが『頑張る子にはエクレアをあげるでシ!』って言うってたよ」

「……………」

それはおそらく、ラッキーの世界のお金のことだろう。

「お兄ちゃん、エクレアは?」

「えーと……、ごめんね。無い」

「えー！ 楽しみにしてたのに。じゃあ明日はちゃんと用意してね」
「……………」

どうすればいいのか。

溜息を吐いて頭を抱えるレッド。そのレッドの肩に、ブルーが手を置いた。

「この子は僕と一緒にだ。何処にも行き場がない」

レッドがチラリとブルーを見る。

「いや、ブルーとは少し違うと思うが……………」

「僕達で守ってあげよう」

「……………」

女の子が両手を使ってハートの形を作り、可愛くポーズを決めた。

「よろしくねー」

こうして、バトルハートが魔術戦隊の仲間に加わった。

合コンと浮気と

夜。

二階の部屋で、レッドはいつもより少しだけお洒落なシャツに着替えながら、ラッキーに告げた。

「少し出掛ける」

レッドがこの時間に出掛けるのは珍しい。ラッキーが首を傾げた。

「どこに行くでシか？」

「……合コン」

呟くように答えたレッドにラッキーは大きく頷いた。

「合コン？ ああ、不純異性交友でシか」

「違う！」

レッドは溜息を吐いて、恨みがましい目でラッキーを見つめる。

「誰かさんのせいで金もないし本当は行きたくないんだけど、どうしても人数が合わないって泣きつかれたから、仕方なくちょっとだけ顔を出すんだ」

「言い訳がましいでシ」

「あのなあ……。まあいい、行ってくる。すぐ帰ってくるから変なことしでかすなよ」

レッドは店の裏口から外に出て、薄暗い道を歩いて行く。

教えられていた合コン会場の居酒屋は、幸いにも歩いて行ける距離だった。

「おーい！ こっちこっち！」

店の前でレッドに気付いて手を振る大学時代からの友人達に、軽く手を上げる。

「久し振りだな。お前最近付き合い悪いから」

肩を叩かれて、レッドは曖昧に笑った。

まさか異世界生物に居座られて困っているとも言えないし、言ったとしても信用はしないだろう。

「今日は可愛い子が来るみたいだぞ」

ラッキーと出会う前なら喜んだ言葉も、今はあまり魅力的に感じない。どうも心配事や悩みのほうが大きすぎて、女の子に興味がないのだ。

居酒屋の店内に入り、暫くすると女の子達がやってきた。

お決まりの自己紹介から始まり、女の子の話に適当に相槌を打ちながら過ごす。笑顔の女の子は可愛いが、やはりそれくらいのことしか思えない。

レッドは、ポケットから携帯電話を取り出してチラリと見た。

居酒屋に入ってから、約一時間。

ラッキーも気になるのでそろそろこっそり抜けようと、レッドは立ち上がる。

「ちよつとトイレ……」

小さく告げて、レッドは足早に出口へと向かった。

後ろを振り向くと、友人達はレッドが抜けたことに気付いていない様子だったので、そのまま外に

「え!?!」

出ようとしていたレッドが驚く。

視線の端、トイレから出てきた女性の姿。

「ピンク?」

「レッド……」

いつもより大人っぽい服と化粧。しかし紛れも無くその人物はピンクだった。

ピンクもレッドの姿に驚いたのか、呆然と立っている。料理を運ぶ従業員を押し退けるようにして、レッドはピンクの傍へと行った。

「何をしてるんだ？」

「レッドこそ……」

「ピンクは。いや、とりあえず出よう」

この場で話すのはマズいだろう。

レッドはピンクの腕を引っ張って、店外へと出た。

「で？ 未成年がこんなところで何してるんだ？」

咎めるような口調に、ピンクは口を尖らせる。

「お酒は飲んでないよ」

「でも高校生が遊ぶ場所ではないだろ？」

「……」

俯いたピンクは、いつもとあきらかに様子が違う。何かあったのだろうか。

「なあ、イエローはこのこと知ってるのか？」

「……」

レッドはフウッと息を吐き、歩き出した。

「帰ろう。送っていくから」

「……うん」

レッドを追いかけるように、ピンクが歩き出す。

レッドは少し歩調を遅くし、ピンクの隣に並んだ。

「で？ 何で？」

「うん……」

やはり何かあったのだろう。それもイエロー絡みで。

「喧嘩でもしたのか？」

「……」

ピンクは答えない。

どうしようか。レッドが思索していると、突然横からすすり泣きが聞こえ始めた。視線を向けると、ピンクがポロポロと涙を流

している。

「私、やっぱり駄目だね。見た目や口調だけ合わせても全然意味ない」

「……どうした？」

ピンクが掌で涙を拭う。

「イエロー……、浮気してた」

予想外の言葉に、レッドは「え!？」と驚いた。

見た目はチャラくても、イエローはそんな男ではない筈だ。

「まさか!」

「だって! ……見たもん。綺麗な女の人と腕組んでるの」

「腕? あいつは気さくな奴だから」

そんなことくらいあるだろう、と言おうとしたレッドに、ピンクは首を振る。

「友達も、女の人とキスしてるの見たって言ってた」

「……」

キス。それこそピンクを大事にしているイエローにはありえないのだが……。

「いや、何かの間違いだろう。それにしても……だから合コン?」

ピンクが持っていた鞆をギュツと握り締め、眉を寄せた。

「たまたま 友達のお姉さんに誘われて、新しい出会いでも求めようかなって……」

またピンクの目から涙が流れる。

レッドはピンクの肩を叩いた。

「ヤケになるなよ。イエローに確かめたのか?」

「……ううん、まだ」

ピンクが呟くように言う。

「だったら確かめよう」

「でも……」

「大丈夫。見間違いだ」

「うん……」

それからピンクの家まで、二人は無言で歩いた。

悪者決定

カラカラというベルの音に、洗い物をしていたレッドとカウンタ―で宿題をしていたバトルハートが顔を上げる。

「いらつしゃい、シル」

「何故こんな時間に子供がいるのですか？」

レッドの言葉は、シルバーの不機嫌な声に遮られた。

午後八時。確かに子供が出歩いて良い時間帯ではない。が、それにしても。

小さな子供には決して向けてはいけない種類の視線に、レッドは内心溜息を吐きながら洗い物をやめてタオルで手を拭く。

「シルバー、この子はバトルハートだ。バトルハート、この人はシルバー」

眉を寄せるシルバーに、バトルハートは元気よく挨拶をした。

「こんにちは、シルバーちゃん！」

シルバーの眉間の皺が深くなる。

「シルバー、『ちゃん』？」

レッドが「まあいいじゃないか」と言いながら席を勧め、シルバーはじつとバトルハートを見ながら腰掛けた。

「まさか、こんな子供が新しい隊員だと言つのではないでしょうね」

「あー……、そつだがまあ自主的に参加したというか……」

「あの異世界生物に騙されたのでしょうか？」

シルバーが大袈裟に溜息を吐き、バトルハートに命じる。

「帰りなさい。子供が遊んでいい時間ではありません」

バトルハートは唇を尖らせて、チラリとレッドに視線を向けた。

「だって……」

レッドが慰めるように少し笑って、バトルハートの頭を撫でる。

「俺が後で送っていくから待っててって言ったんだよな。こんな小さい子を一人で帰すほうが危ないだろ？ ちよつと良かった、シルバーちよつと店番してくれ」

「私が？」

驚くシルバーをよそに、レッドはエプロンを脱ごうとしたが、そこでバトルハートが「あ！」と声を上げたのでレッドの手が止まった。

「どうした？ バトルハート」

バトルハートが首を傾げる。

「レッドちゃん、エクレアは？」

「ああ、そうだったな」

ラッキーが余計なことを言ったせいで、バトルハートは魔術戦隊に入ればお菓子のエクレアが貰えると勘違いしていた。しかし本当のことを教えるのも可哀想とレッドは思い、今日はエクレアを用意しておいたのだった。

「冷蔵庫にあるから。ちよつと待って」

レッドが戸棚から皿を出して、冷蔵庫を開ける。そして、

「………………。しまった、やられた」

額に手を当てた。

ある筈のエクレアが消えている。それどころかチーズやハムといった他の食料も消えていた。

「ごめん、バトルハート。ラッキーに食べられたみたいだ」

「ええ！？」

バトルハートが目を見開く。

ラッキーには『バトルハートのエクレアだから食べるな』としつかり言っておいたが、そんな言葉ではあの底なしの食欲を抑えることは出来なかったようだ。

「エクレアー！」

手をバタつかせて愚図るバトルハートの視線に合わせるように、レッドが軽く膝を折る。

「ええと、じゃあ帰りにコンビニで買おうか」

バトルハートは首を横に振った。

「コンビニのエクレアなんていつも食べてるもん！今日はとびきり美味しいエクレアがあるってラッキーちゃんが言ったのに！」

「……ラッキーが？」

何故余計な言動をするのか。

レッドがチラリと壁に掛けられた時計を見る。新しいエクレアを買おうにも、ケーキ店は既に閉まっている時刻だ。

「ごめんな。今日は諦めてくれ」

「やだ！ エクレ」

「無いと言っているでしょう？」

不意に横から聞こえた冷たい声に、レッドとバトルハートはハッと振り向いた。

眇められた目と不愉快そうに歪んだ口元。容赦ないシルバーの視線に、バトルハートがビクリと震える。

「しつこいですよ。無い物は無い。我が儘はやめなさい」

「だってレッドちゃんは使い魔だから」

「わけのわからないことを言わない」

ピシヤリと言われ、バトルハートの目にみるみる涙が溜まっていた。

「う。だってエクレ」

「まだ言うのですか？ 理解力のない子供ですね」

「……………」

一瞬の静けさの後、

「う、うわーん！」

バトルハートは大声を上げて泣き出した。

レッドが慌ててカウンター内から出てくる。

「シルバー！」

「何ですか？」

「言い過ぎだ」

跪いてバトルハートの頭を撫でるレッドに、シルバーは鼻を鳴らした。

「うるさいからです」

「まだ子供だろう」

「だから何ですか？ 甘やかしてばかりでは、ろくな子に育ちませんよ」

「それは違う。子供に必要なのは愛情だ」

そうしてレッドとシルバーが言い争いを始めた時、壁際から眩い光が溢れた。

「バトルハート！ どうした！？」

現れたブルーが、泣きじゃくるバトルハートに驚いて駆け寄る。

「まさか、シルバーに虐められたのか？」

「虐めてなどいません。その子供が我が儘を言ったんですよ」

ブルーはシルバーを激しく睨みつけた。

「こんな子供にまで厳しくすることないだろう！ バトルハート、おじさんが送ってあげるから帰ろう」

ブルーに優しく背中を撫でられ、バトルハートが小さく頷く。レッドがホッと息を吐いた。

「頼むよ、ブルー」

バトルハートがブルーに連れられ、店を後にする。

カラカラと音を立ててドアが閉まったのを確認し、レッドは厳しい視線をシルバーに向けた。

「シルバー」

「何ですか？」

まるで何事も無かったかのような態度のシルバーに、レッドは眉を寄せる。

「さすがに言いすぎだ。今度バトルハートに謝ってくれ」

シルバーが片眉を上げる。

「まるで私が悪いみたいない言い方をしますね」

「シルバーが確実に悪い」

「……そうですか」

レッドを馬鹿にするように肩をすくめ、シルバーは立ち上がる。

「シルバー」

「今日は帰ります」

「シルバー！」

レッドの制止にチラリとも振り返らず、シルバーは店を出て行った。

大切なのは

「チエンジハート！」

目の前で変身したバトルハートに、イエローが目を見開き歓声を上げる。

「おおお！？ す、凄いじゃねーか！」
自慢げに笑うバトルハート。

イエローは勢いよく振り向き、ラッキーを見た。

「グリーンデビル！ 俺にもバトルスーツを」
「嫌でシよ」

最後まで言わせることなくラッキーが断る。

「何でだよ！」
「フンツでシ」

掴み合いの喧嘩を始めたイエローとラッキーに、レッドが溜息を吐いた。バトルハートより余程子供のようだ。

「ほら、やめる」

こんな光景をバトルハートに見せるのは教育上良くない。レッドは少し顎を上げ、大きな声で呼びかけた。

「えーとブルー！ ブルーはどっかにいないか！？」

すると空間が裂け、ブルーがヒョイと顔を出す。

「何か用かな？」

「ブルー、バトルハートを家まで送ってくれ」

「ああ、分かった。行こうか、バトルハート」

ブルーが空間から喫茶店内へ入り、バトルハートに手を差し出した。

「うん。じゃあね、レッドちゃん。イエローちゃんとラッキーちゃん

んもバイバイ」

左手でブルーの手を握って右手を振るバトルハートに、レッドも手を振り返す。

「またおいで」

「おう！ またな！」

「また来るでシ！」

互いの顔を掴みながら、イエローとレッドも挨拶だけは返した。カラカラと音を立ててドアが閉まると、ついに取っ組み合いを始めた一人と一匹に顔を顰めながらレッドは冷蔵庫まで行き、そこから大きなケーキを取り出した。

「ラッキー、これ持って二階に行ってくれ」

ラッキーが振り向き、パツと顔を輝かせる。

「大きい桃のケーキでシ！」

そう言った瞬間、ラッキーはイエローを壁に投げ飛ばし、レッドからケーキを奪うように取って二階へと飛んでいった。

壁で背中を打ちつけたイエローが、呻きながら立ち上がる。

「うー、くそ。グリーンデビルめ！」

「イエロー、ここに座れよ」

悪態を吐くイエローに、レッドは席を勧めた。

「ああ、サンキュ」

顔を上げ、イエローが首を傾げる。

「ん？ どうした、難しい顔をして」

「いいから座れ。大事な話があるんだ」

「大事な話？」

益々首を傾げながら、イエローはとりあえず椅子に座った。

「で、何だ？」

「……………」

レッドがじつとイエローを見つめる。

「どうしたんだよ、そんな真剣な顔して。いよいよこの店が潰れるのか？」

ピクリとこめかみを動かし、レッドはいきなり核心に迫った。

「イエロー。まさかとは思うけど、浮気してるのか？」

イエローがポカンと口を開ける。

「……………はあ？」

レッドは目を眇め、もう一度イエローに訊いた。

「浮気だ。してるのか？」

眉を軽く寄せて、イエローが首を横に振る。

「浮気……………？ してねえけど」

「……………」

嘘を言っている感じではない。先日ピンクから聞いた『浮気疑惑』が気になりイエローを呼び出したのだが、どうやら浮気というのはピンクの思い違いのようだ。

良かったと安堵しつつ、しかし一応念のためにレッドはイエローに訊いた。

「そうか。ちなみに、そんなことは無いと思うが、最近ピンク以外の女とキスしてないよな？」

当然、『当たり前だろう！』という答えが返ってくると、レッドは思っていた。しかし予想に反し、イエローは明らかに動揺した様子で視線を彷徨わせた。

「……………何で知ってたんだ？」

口元を押さえて上目遣いをしてくるイエロー。レッドは目をギョツと瞑って、額に手を当てた。

まさかの真実、だというのは。イエローに限ってそんなことはないと信じていたのに。

「イエロー……………」

落胆するレッドに、イエローは慌てて言い訳をした。

「違う、浮気じゃねえよ！ あれは前の彼女で、相談があるって言われて、それで、その、ちょっと彼女が酔っ払って、そう！ 酔ってたんだよ！ 俺は突然されたから避けられなくて……！」

酔った勢いでうっかりとでも言いたいのだろうか。レッドが冷めた目でイエローを見る。

「へえ……」

「本当だつて！ 俺も『やめろ』って怒ったんだぜ！」

必死で身の潔白を訴えるイエローに、レッドは首を傾げて訊いた。

「じゃあ当然、もう会ってないよな」

「……………」

会っているのか。

レッドは項垂れて溜息を吐いた。

「イエロー……………」

「いや、違つって！ 相談に乗ってるだけだ。彼氏と上手くいってないらしくて、すげー泣かれて、それで！」

「泣かれたからキスしたのか？」

「いやだから、あれは事故のようなものだつて」

そんな事故があるか、と呟き、レッドは顔を上げてイエローの目を真っ直ぐ見つめた。

「ピンクが泣いてたぞ」

イエローが息を呑む。

「……………マジで？ つーか何でこのこと知ってたんだよ」

「その元カノと腕組んで仲良くしてるところを目撃したらしいぞ」

「……………げ」

イエローは引きつった顔で身を乗り出した。

「もしかして、最近誘っても『忙しい』って断られるのは、避けられてるのか？」「そうだよ」

「……………」

イエローの身体が沈み込み、そのままカウンターに突っ伏す。

「ピンクはいい子だぞ。大事にしるよ」

「本当に、何も無いんだって……………」

「言い訳ならピンクに言え」

「……………」

「イエローにとって、大切なのはどっちだ？」

「……………」

イエローが身体を起こして立ち上がった。そして尻ポケットから携帯電話を取り出しながら、店を出て行く。

それを見送って、レッドはカウンターの上に残された珈琲カップを手に取り、流しにそっと置いた。

二時間後。

椅子に座って雑誌を読んでいたレッドの携帯電話に、イエローから電話が掛かってきた。

「話し合って、分かってくれたよ」

「そうか」

「ありがとな」

「ああ」

大丈夫そうだとホッと息を吐く。

もう泣かせるなよ、と心の中で呟いて電話を切り、レッドは雑誌に視線を戻した。

店内禁煙となります

もうすぐ十時になろうかという時刻。

レッドの喫茶店内では、シルバーが本を片手に珈琲を飲み、イエローが食後の一服を吸おうと、ポケットから煙草を取り出ししていた。イエローは煙草に火をつけると、深く吸って上に向かって煙を吐き出す。

「はあ、美味しい」

一本吸いきって、もう一本取り出すイエロー。

レッドが少しだけ眉を寄せて、そんなイエローに声を掛けた。

「あまり吸いすぎると、身体に良くないぞ」

ちょっととした親切心のもりだった。だがイエローは、一瞬動きを止めた後、レッドを睨みつけた。

「ああ？ なんだよ」

あからさまに不機嫌になったイエローにレッドは若干身を引きなから、それでもはつきりと言う。

「イエローは吸いすぎだと思っぞ」

するとイエローは大袈裟に溜息を吐き、緩やかに首を振って煙草の灰とトントンと灰皿に落とした。

「レッド、お前もか」

レッドが眉を寄せる。

「『お前も』って何がだ？」

イエローは煙草を口に持っていていき、一口吸ってから答えた。

「昨今の禁煙ブームっておかしくないか？ 俺は健康を害することを承知で、自己責任でもって吸ってんだよ」

「いや、それは分かるが……」

「分かってんなら口出しするなよ」

「……………」

フンと鼻を鳴らすイエローに、レッドは困惑する。

イエローの言うことも分かるが、それにしてもやはり吸いすぎだろう。ただでさえ不規則な生活をしているのだから、もう少し健康に気を遣ってほしい。

どういえば分かってもらえるのかとレッドが小さく唸った時、横から不意に声がした。

「副流煙があるでしょう？」

レッドとイエローが視線を横に向けると、シルバーが読んでいた本をパタリと閉じて続けた。

「『受動喫煙』。煙草は周りにも害があるのですよ。それにせつかくの珈琲が不味くなるのもいけませんね」

イエローが舌打ちをする。

「あー、そりゃ悪かったな。でも」

シルバーが片眉を上げた。

「『でも』？ 何ですか？」

「……………分かったよ」

口ではかなわないと悟り、イエローが口を尖らせて渋々煙草をもみ消す。レッドが苦笑しながら、そして少しだけホツとしながら灰皿を下げた。

「あーあ、本当に愛煙家には辛い時代が訪れたな。なあ、シルバーは吸わないのか？」

イエローの質問にシルバーは首を振る。

「吸いません。身体に悪い物を、わざわざ好んで口にはしません」

「悪いと決めつけるな！ 煙草にだっていいところはたくさんある

！」

「たとえば？」

「美味しい」

「……………」

シルバーが馬鹿にするように口角を上げ、イエローは慌てて別の理由を考えた。

「いやいや、待て。煙草を吸うとだな、気分転換になる。ストレスだつて吹き飛ばす力があるんだぞ」

「それは煙草ではなくても、別のもので解決できるでしょう？」

「そんなことはない。煙草だからこそ得られるものがあるんだ。騙されたと思つてシルバーも吸つてみる」

「吸いません」

「好き嫌いは良くないぞ」

「……イエロー」

イエローとシルバーが小さな言い合いを始め、レッドが珈琲ポッドを手にして二人のカップにおかわりを注ごうとする。

「そもそもだなあ、シルバーは　お？」

壁際から光が溢れ、イエローの言葉が途切れた。そして光の中からブルーが現れる。

「よう、ブルー」

「いらつしゃい」

「こんばんは」

最早、この奇妙な来店方法もすっかり浸透して誰も驚かない。

ブルーは軽く手を上げてイエローの横に腰掛け、珈琲を注文した。そしてポケットから煙草を取り出す。

その様子を見たイエローが、歓声をあげた。

「おお！　ブルーも愛煙家か。同士よ！」

大袈裟に喜んで両手を広げ、イエローはブルーに抱きつく。それ

とは対照的に、シルバーが軽蔑するような視線をブルーに向けた。

「仕事が無い、お金が無いと言いなから煙草ですか？」

ブルーではなくイエローが反論する。

「うるせえよ！ 煙草は人生の潤いだ。なあ、ブルー」

味方を得たと上機嫌なイエロー。しかしブルーは、静かに首を横に振って煙草に火をつけた。

「イエロー、これは煙草じゃないよ」

ブルーの発言に、イエローが「ん？」と首を傾げ、レッドとシルバーが眉を寄せる。

「おいおい、どう見ても煙草だろう？」

「違う。これはラッキー様がくれた『変身アイテム』だ」

「変身アイテム？」

ブルーは口端を少し上げて笑った。

「これを吸うと、嫌なことをすべて忘れて楽しい気分になれる。そう、新しい自分に変身できるんだ」

そして煙草 ではなく変身アイテムを吸い、ブルーが恍惚とした表情をする。

「お、おい。ブルー？」

戸惑うイエロー。レッドとシルバーが視線を交わした。

「ああ、気持ちいい」

ブルーがクスクス笑ったその瞬間。

シルバーがイエローを押し退けてブルーに飛びかかり、床に押し倒す。

「イエロー！ この怪しいものを取り上げてください。早く！」

「あ？ お、おう！」

命じられたイエローは、何がなんだか分からぬままに、暴れるブルーから変身アイテムを取り上げた。

「イエロー！ こっちに」

続けてレッドに言われ、変身アイテムを手渡す。それをレッドは流しの中に捨て、水を掛けた。

ブルーが悲鳴のような声をあげる。

「何をする！ ラッキー様がくれたのに！」

シルバーがブルーの上から退いて、息を吐いた。

「あれはおそらく危ない薬です。吸ってはいけません」

イエローが「え！？」と驚く。

「そうだったのか、あの野郎……。ブルー、煙草はいいけど薬は駄目だ！ グリーンデビルを崇拜するのはヤバイからやめろ。ってゆーか、そんな変身アイテムは魔術戦隊の顧問として認められない！」

「いつから顧問になったんですか？」
イエローの忠告も、さりげないシルバーのツッコミも、ブルーの心には響かなかった。

「どうして……。僕はただ」

唇を噛みしめるブルーの胸ポケットから、シルバーが残りの変身アイテムを素早く抜き取る。

「あ！」

叫んだ時はもう遅かった。変身アイテムはレッドの手によって水浸しにされてしまう。

嘆くブルーに向かい、レッドは大きく息を吸い込んで宣言した。

「今日から店内禁煙とする！ 煙草及び煙草っぽい変身アイテムも

禁止だ」

ブルーとイエローが目を見開く。

「ちょ、ちょちょちょと待て！ 何でそうなるんだよ！」

「イエロー、ブルーの為だ」

「いや、でも煙草と変身アイテムは別物だろう！？」

シルバーがイエローの肩に手を置いた。

「イエローの、そして周りの者の健康の為でもありますよ。我慢してください」

「そんな！ シルバー！」

慌てるイエローをよそに、ブルーは静かに立ち上がり、よろけながら歩き出す。そして壁際から光が溢れ、ブルーは消えた。

「ああ、ブルー！ ……ちくしょう！ 禁煙ブームめ！」

イエローが口汚く罵り、カウンターを拳で殴った。

ママの新しい彼氏

レッドがカップに珈琲を注ぎ、シルバーの前に置く。店内に珈琲の香りが広がった。

やはり店内禁煙にして正解だったとレッドは思う。

イエローはいろいろと文句を言っていたが、こうして他の匂いに邪魔されること無く、珈琲の香りだけを楽しめるというのは良い。

これで少しでも煙草の本数が減れば良いが、と、あれ以来まだ一度も来店していないイエローの姿を思い浮かべていると、カラカラと入り口のベルが鳴った。

もしかして……と振り向いたレッドが驚く。

「え？ バトルハート！ こんな時間にどうしたんだ」

そう言いつつ時計を確認すると、既に九時半を過ぎていた。決して小さな子供が一人で出歩く時間ではない。

バトルハートはそんなレッドに子供らしからぬ曖昧な笑みを向け、シルバーから離れた椅子に腰掛けた。

「うん、ちよつとね」

「『ちよつと』って……」

「レッドちゃん、お腹空いた」

バトルハートの言葉に、レッドは更に驚く。

「夕飯、食べてないのか？」

「食べ損なっちゃったの」

何故、という疑問をとりあえず後にして、レッドは急いで冷蔵庫の中を覗き込んだ。

「えーと、バトルハート、焼きそばは好きか？」

「うん」

「じゃあ、すぐに作るから待ってて」

冷蔵庫から野菜を取り出して包丁で切りながら、レッドはチラリとバトルハートを見る。余程空腹なのか、バトルハートは身を乗り出してレッドの手元を凝視していた。

「……………」

ツキンと胸が痛み、レッドは視線を横に逸らす。すると今度は眉を顰めてバトルハートを見つめるシルバーの姿が目に入り、また子供相手に厳しい発言をするのではないかと心配で溜息が漏れた。

それでも手だけは休めることなく、フライパンで炒め終わった焼きそばを皿に盛り、バトルハートの前に置く。

「美味しそう！ いただきます」

バトルハートは早口で言って箸を持ち、まだ熱々の焼きそばを食べ始めた。

静かな店内に咀嚼の音だけが響く。

口いっぱい頬張る様子に、微笑ましさより不安を感じる。

何かがあつたのは確かだが、それをどうやって聞き出そうかとレッドが考えていると、横から遠慮の無い言葉が飛んできた。

「で？ こんな時間に何故子供がフラフラ出歩いているのですか？」

レッドが「シルバー！」と言いながら首を横に振る。

バトルハートは一瞬シルバーを睨みつけるが、すぐに焼きそばに視線を戻した。

「返事も出来ないのですか？」

「シルバー、やめろ」

なおもしつこく訊くシルバーを、レッドが諫める。

バトルハートは口の中の焼きそばを飲み込んで、フウッと息を吐

いた。

「別に。ママの新しい彼氏がうちに入り浸っているから、レッドちゃんに会いに来ただけだよ」

レッドとシルバーの動きが止まる。そしてそんな二人には目もくれず、バトルハートはまた焼きそばを口に運び、租借しながら話し始めた。

「今回の彼氏はヒモだから、うちに良く来るんだよね。でもバトルハートは新しい彼氏は好きじゃないの。『せいりてきにうけつけない』ってやつかな？」

まるで他人事のように、バトルハートは淡々と言う。

思わず「ヒモ……」と呟いたレッドに、シルバーが厳しい視線を向けた。

「どういう環境で育っているのですか？ この子は」

「俺に訊かれても……」

むしろ知りたいぐらいだと唸るレッドに鼻を鳴らし、シルバーは身体ごとバトルハートの方を向いた。

「だからと言って、夜遅くに外出は駄目でしょう？ それを食べたら帰りなさい」

口を歪めるバトルハートにシルバーが念を押す。

「分かりましたね」

バトルハートは渋々頷いた。

「はい。分かったよ。あ、レッドちゃんジュース頂戴」

「ん？ ああ……。りんごジュースでいいか？」

「うん」

レッドは冷蔵庫からジュースを取り出してコップに注ぎ、残り少ない焼きそばを箸で集めるバトルハートの前に置く。そして躊躇いつつもバトルハートに訊いた。

「なあ、ママとちょっとお話ししたいんだけど、会えるかな？」

バトルハートが顔を上げて笑う。

「あ、いいよ、気を使わなくて。ママは恋愛依存性なんだって」
「は？」

「別に悪い人じゃないし、私とママは仲良しなんだよ。ただ、ママは好きな人が出来ると他が見えなくなっちゃうんだ。で、尽くして尽くして捨てられる。ちょっと可哀想だよね」

「……………」

大人っぽいにもほどがある。

「バトルハートは七歳だよね」

確認するレッドに、バトルハートは首を傾げた。

「そっだよ。ごちそうさま！」

最後の一口を掻き込んでジュースを飲むと、バトルハートは椅子から降りる。

「ほら、帰りなさい」

追い払うかのように手を振るシルバー。バトルハートがムツとして眉を顰めた。

「帰るよ！ ベーだ！」

舌を出して入り口のドアへと走っていくバトルハートに、レッドが慌てて声を掛ける。

「あ、バトルハート、送って……………」

しかしバトルハートはそのまま店を出て行ってしまった。

「あー！ マズいな、走っていった。シルバー、店番を」
「ごちそうさま」

ポケットから取り出した千円札をカウンターに置き、シルバーも立ち上がって店を出て行く。

「シルバー！ くそ！ 仕方ない」

薄情者めと眩きながらレッドはエプロンを脱ぎ捨て、バトルハ
トを追いかけて駆け出した。

宇宙人は存在するか

「昨日のテレビ見た？」

夕方、来店したピンクが、カフェオレを飲みながらレッドに話しかけた。

「ほら、深夜にやってる」

「ああ、とレッドは頷く。」

「『世界不思議ガッテン』？」

「そうそう」

世界の不思議をクイズ形式で紹介して、回答者が納得したら『合点』と叫ぶこの番組は、内容の面白さからなかなかの人気があり、レッドとピンクも毎週欠かさず見ていた。

「古代遺跡に宇宙人とUFOの壁画があるって、凄くない？」

「あれな。でもどうかな。他のものを描いたけど、たまたま宇宙人っぽく見えただけかもしれないだろ」

「そうかなあ。私はありだと思っよ。広い宇宙には人間同様に進化した生物がいるはずだもん。それが古代に地球に来ていたとしてもおかしくないよ。うん。絶対そうだよ」

力説するピンクにレッドは苦笑する。

「まあ異世界生物がいるくらいだしな。宇宙人くらいいてもおかしくないか」

「そうだよ。異世界生物がいるくらいだもん」

ピンクはレッドの言葉に満足気に頷き、カフェオレを置いて、少し身を乗り出した。

「ねえ、そんな昔から宇宙人は何しに来てたのかな？ 攻撃してこないってことは仲良くしたいのかな？」

レッドが首を捻って唸る。

「大昔から地球に来ているのに、交流が無いどころか未だその存在

「がはつきり確認されていないのは不気味じゃないか？」

「地球が発展するまで待っているとか？」

「それは何の為に？」

「そういう宇宙条約みたいなのがあるんじゃないかな」

顎に手を当てて真剣な表情で話すピンクをレッドはじっと見つめた。

「……発言がイエローっぽくなってきたな」

ピンクが「え？」と驚き、それから目を伏せる。

「……そうかな」

呟くような声にレッドは眉を寄せた。

「仲直り、したんだよな？」

「うん。でも……」

「どうした？」

ピンクは顔を上げ、悲しげに笑う。

「もしかしてイエローは、元カノとよりを戻したいのかも」

「まさか」

そんなはずは無いと言おうとしたレッドに、ピンクが首を横に振った。

「だって電話しても出ないことがあるし」

「忙しいんだろ」

「……」

ピンクは俯き、カップの中のカフェオレを見つめる。そして再び顔を上げ、レッドに笑いかけた。

「それよりさ、宇宙人のことなんだけど、公表してないだけで一部の人間とは交流があるのかもしれないよ」

あきらかに無理をしている笑顔。しかしレッドはそれ以上追求することなく、ピンクの言葉に頷いてみせる。

「……そうだな」

「うん！」

ピンクが必要以上に大きな返事をしたその時、二階からガタガタ

と音が聞こえた。

レッドとピンクが階段を見ると、ラッキーがフワフワと飛んでくる。

「あ！ ピンクちゃん！」

ラッキーはピンクの姿に気付くと飛ぶスピードを上げ、カウンターの上に降り立った。

「ピンクちゃん、会いたかったでシ！」

尻尾をパタパタと振るラッキーにピンクは微笑む。

「ありがとう。あ、そうだ。ねえ、ラッキーは宇宙人いると思う？」

「宇宙人でシか？」

ラッキーが首を傾げ、レッドが説明をした。

「ほら、昨日テレビでやってたの、一緒に観てただろ？ ピンクはあれを見て、宇宙人がいるか気になったらしいぞ」

するとラッキーはポンと手を叩き、軽い感じで驚くべき発言をする。

「ああ、あれは宇宙人じゃないでシよ。ラッキーと同じように別の世界から来た生物と乗り物でシね」

レッドとピンクが目を見開いた。

「え！？」

「別の世界？」

ラッキーが頷く。

「はいでシ。もう滅ぼしたでシけどね」

「……滅ぼした？」

「お腹空いたでシ。何かあるでシか？」
ラッキーは冷蔵庫へと飛んでいく。
レッドとピンクが顔を見合わせた。

高級エクレア

夕方、レッドの喫茶店で、ピンクがバトルハートに宿題を教えていた。

「終わったー！」

鉛筆を置いてバンザイをするバトルハートにレッドが訊く。

「ご飯にするか？」

「うん！」

「ピンクは？」

ピンクは笑って首を振った。

「あたしは家に帰って食べるよ。今日は両親が珍しく早めに帰ってくるんだ」

「ああ、共働きだったな」

「うん」

会話をしながら、レッドは素早く食事の準備をする。そして出来上がった料理をバトルハートの前に置いた。

「ありが　うわ、椎茸だ」

バトルハートが顔を顰める。レッドが首を傾げた。

「嫌いだったか？」

「……うん」

肉と一緒に煮込まれた椎茸を、バトルハートはじつと見つめる。ピンクが苦笑して、そんなバトルハートの頭を撫でた。

「うーん、あたしも小さい頃は苦手だったかも。でも栄養があるんだよ」

バトルハートが頷く。

「……食べるよ。レッドちゃんが作ってくれたんだから」

「偉い！」

眉を寄せながらも椎茸を口に入れて一生懸命租借するバトルハートと、応援するピンクの姿は姉妹のようで微笑ましく、レッドの口に笑みが浮かんだ。

なんとか椎茸を飲み込み、他のおかずもご飯も綺麗に食べて、バトルハートは両手を合わせる。

「ごちそうさまでした」

レッドが食器を片付けた。と、その時、カラカラとベルの音がして、シルバーが来店する。

「いらっしやい」

「こんにちはシルバー」

レッドとピンクが挨拶する中、バトルハートはチラリとシルバーを見ただけで、視線を前に向けた。

「レッド、珈琲を」

「ああ」

注文をして、いつものようにカウンター席に座る。と思いきや、シルバーはバトルハートの傍まで行き、そして右手に持っていた紙袋をカウンターの上に置いた。

「え？ 何？」

訝しげなバトルハートの質問には答えず、ピンクから二つ離れた席にシルバーは座る。

ピンクが紙袋に描かれたロゴを見て、「あ！」と声を上げる。

「これ、有名なケーキ屋のロゴだ」

「ケーキ？」

バトルハートが首を傾げ、ピンクがシルバーに訊いた。

「開けていいの？」

「どうぞ。差し上げます」

「バトルハート、くれるんだって」

ピンクが紙袋の中から箱を取り出して開ける。すると。

「あ！ エクレアだ！」

バトルハートが声を上げて目を見開く。

中には大きなエクレアが四本並んでいた。

「凄く美味しそうだね、バトルハート」

「うん」

エクレアを見つめる二人の前に、レッドが皿とフォークを置く。

「ラッキーに食われる前に、食べたほうが良いぞ」

ピンクが「そうだね」と慌ててエクレアを皿に載せ、バトルハートの前に置いた。

「いただきます」

バトルハートとピンクが大きな口を開けてエクレアを頬張る。

その光景を見つめながら、レッドはシルバーの前に立った。

「いいところあるじゃないか」

「頂き物ですよ。私は食べないのであげただけです」

「ふーん、そうか」

おそらく嘘だろうなと思いつつも、レッドは頷く。

「美味しい！ シルバーちゃんありがとう」

満面の笑みで礼を言うバトルハートに、シルバーは無表情に言う。

「顔にクリームがいつぱい付いていますよ」

「あ」

レッドがお手拭を渡し、バトルハートはそれで顔を拭いた。

「暗くなってきたので、それを食べたなら帰りなさい」

「うん。シルバーちゃん送ってね」

シルバーは軽く目を見開いて、首を振る。

「そんなことはブルーにやらせない」

バトルハートが不満げに口を尖らせた。

「だって、ブルーちゃんはいないもん」

「呼べば空間から出てくるのではないですか？」

「今日はシルバーちゃんに送ってもらおうのー！」

「……………」

シルバーが小さく舌打ちをして呟く。

「これだから子供は嫌いなんです」

「おい、シルバー」

レッドが小声で注意し、それと同時にバトルハートが立ち上がった。

「ごちそうさま。シルバーちゃん帰ろ」

「……………」

返事をしないシルバーに、レッドとピンクが同時に言う。

「送ってやれ」

「送ってあげてよ」

溜息を吐いて、シルバーは立ち上がった。

「あ、バトルハート、余ったエクレアは持って帰ろっか」

ピンクがエクレアの入った紙袋をシルバーに渡す。シルバーは左手でそれを受け取り、少し躊躇してから右手でバトルハートの小さな手を握った。

「じゃあねー！」

二人はそのまま喫茶店を出て歩いていく。その姿を窓越しに暫く見つめ、ピンクは笑ながら首を傾げた。

「シルバーって冷たいのが優しいのか分からないね」

レッドが苦笑する。

「そうだなあ、優しくて厳しいんじゃないか？」

「うーん、そうなのかな。さて、私も帰ろう。ご馳走様」

「ああ、またな」

ピンクも帰り一人になったレッドは、スポンジを手にとって、鼻歌を歌いながらシンクに溜まっていた食器を洗い始めた。

絶望再び

「ふー。お腹いっぱいだし」

ラッキーがカウンターの上に寝そべる。

喫茶店では『昼食』という名の、大食い異世界生物ラッキー対店主レッドの戦いが、たった今終わったところである。

「ラッキー、最近また食べる量が増えてないか？」

レッドがぐつたりとしながら言う。

「そんなことないでシよ。ところで、今日のおやつと夕食と晩御飯と夜食は何でシか？」

「……もう食材が残っていない」

ラッキーはやれやれと溜息を吐いた。

「食材を切らすなんて、店主失格でシよ」

「ラッキーが食べすぎなんだよ」

レッドとラッキーがそうして話していると、空間が裂けてブルーが現れた。「ブルー、いらっしや……どうした？」

レッドが眉を寄せる。ブルーはまるで出会った時のように、やつれて生気の無い表情をしていた。

ブルーはよろよろと歩き、レッドの前に座った。

「妻と久し振りに会ったら……」

ああ、とレッドは思い出す。確かブルーの妻と娘は、ブルーを置いて出て行ったのだった。

「別れたいと言われて」

「……………」

「恋人が出来て、娘も懐いているから再婚するって。養育費も何もいらぬから早く判子を押してくれと……」

ブルーは顔を両手で覆って首を振った。

「近い将来贅沢三昧させてやると言っても聞かなくて。『馬鹿みた

いなこと言わないで。もっと現実を見なさいよ』と罵られ、僕は、僕は……」

ブルーが嗚咽する。

「あー……」

レッドは掛ける言葉が見つからなかった。

「僕は……悔しいよ……。もっと力があれば、こんなことにはならなかったのに……」

カウンターに寝ていたラッキーが身体を起こす。

「もっと力が欲しいでシか？」

「おい！」

レッドが慌てて、よからぬ事をたくらんでいるであろうラッキーを捕まえようとする。が、するりと逃げられた。

「もっと力が欲しいでシか？ 己を軽視するクズ共に、復讐したいでシか？ もういつそ、この世界ごと破壊したいでシか？」

「おい！ 後半とんでもないことを言ってるぞ！ やめろ、ラッキー！」

ブルーが顔を上げ、ラッキーを見つめる。

「ラッキー様……」

レッドは舌打ちし、食器の入っている棚の奥から小さな箱を取り出した。

「ラッキー！ これを見る！」

ラッキーが「ん？」と振り向く。レッドは箱の蓋を開け、中身を手に取った。

「ほら、お前が好きな饅頭屋の大福だ！」

ラッキーが目を輝かす。

「くれでシー！」

レッドは大福を二階に向けて力いっぱい投げた。ラッキーが追いかけて行く。

「……………はあ、良かった」

後でこっそり食べようと思って隠しておいた大福が役に立った。レッドは大きく息を吐き、額の汗を拭った。そしてブルーを真っ直ぐ見る。

「ブルー、自棄になるなよ。一生懸命頑張れば、奥さんだって帰ってきてくれる……………かもしれないだろ？」

「……………」

ブルーは立ち上がり、壁に向かって歩く。

「おい、ブルー！」

「ありがとう、レッド。でももう……………」

ブルーは振り返ることなく言い、空間に帰っていった。

「……………大丈夫か？」

レッドが呟いた時、二階からラッキーが戻ってきた。

「口先だけの慰めはブルーを余計落ち込ませるだけでしょ」

「……………怪しい思想でブルーを洗脳しているラッキーよりましだ」

「洗脳なんてしてないでしょ」

「……………」

レッドは深い溜息を吐いた。

男はみんな狼なんだよ

朝十時。

レッドはエプロンを脱いで、ラッキーに言った。

「ちょっと出掛けてくる」

「合コンでシカ？」

「こんな昼間っから、そんなもんあるか。デパートに行ってくる」

「デパート？」

首を傾げるラッキーに、レッドは説明する。

「ダチに子供が生まれたから、お祝いを買いに行くんだよ」

「ふーん、いつてらっしやいでシ」

「絶対外には出るなよ」

ヒラヒラと手を振るラッキーに念を押し、レッドは店を閉めて外に出る。最寄駅から電車に乗って、デパートに着いた。

「さて、何にしようか。おもちゃとかでいいのか？」

少し悩んで、レッドはエレベーターに乗り、とりあえずおもちゃ売り場へと行く。

売り場には沢山のおもちゃが並んでいた。

「んー………いっぱいあるな。どうするかなあ」

レッドが唸る。事前に、出産祝いは何がいいのか調べておけば良かったかもしれない。

後悔しつつ、ゆっくり歩きながらおもちゃを見ていると、少し離れた場所から大きな声が聞こえた。

「うわー！ これ欲しかったんだ。本当に買ってくれるの？」

「………ん？」

レッドが首を傾げる。何処かで聞いた声のような気がするが、気のせいかな？

「ありがとう、シルバーちゃん！」

シルバーちゃん!?

この声、口調。言葉。まさか。

レッドは声が聞こえた方向に急いで移動する。するとそこにはやはり、バトルハートとシルバーがいた。

何で二人が一緒に？ しかも今は平日の昼間だ。

バトルハートがピョンピョンと飛び跳ねてシルバーに抱きつく。

シルバーはそんなバトルハートを抱き上げて微笑んだ。

「……………!!」

シルバーが、優しく笑っている。

幻でも見ているのではないかと戸惑いつつ、レッドは二人に声を掛けた。

「バトルハート、シルバー」

二人が振り向く。

「あ、レッドちゃ」

バトルハートが手を振ろうとしたその時。

「え!？」

シルバーがバトルハートを抱えたまま、レッドとは逆方向に早足で歩き始めた。

「ちょ、シルバー！」

レッドは慌てて走って追いかけて、シルバーの腕を掴む。

「シルバー！」

「何ですか？」

シルバーが視線を逸らした状態で答える。

「呼んでるのに、何でどっか行くんだ？」

「ああ、すみません。気付きませんでした」

「……………」
声を掛けて目が合ったのに、気付かないわけなどないだろう。シルバーらしからぬ下手な言い訳に啞然とする。

「何をしていたんだ？」

「ただの買い物ですよ」

「バトルハートの学校はどうした？」

それにはシルバーに抱かれたままのバトルハートが答えた。

「今日は代休なんだよ」

レッドはバトルハートに視線を移す。

「そうなのか？」

「うん。それでシルバーちゃんがね　あ、シルバーちゃん、あつちに戻って！」

バトルハートが指差す方向を見ると、店員が紙袋を持ってキョロキョロとしていた。

シルバーが店員に向かって歩き始め、レッドも付いていく。

店員はシルバーの姿を見つけると、ホツとした様子で駆け寄り、カードと紙袋を渡した。

「これは…………？」

紙袋を指差してレッドが訊くと、バトルハートが満面の笑みを見せる。

「ゲーム機だよ。シルバーちゃんが買ってくれたんだ！」

「シルバーが？」

「うん。あとね、服も買ってくれるって。でね、ご飯食べるの」

「……………」

シルバーがバトルハートを連れて歩き、おもちゃや服を買い与える。それをどう捉えればいいのかわからずレッドは戸惑う。

「えーとシルバー」

「偶然会ったので、暇だったから面倒をみてやっているだけです」

偶然？　暇？　仕事が忙しいといつも言っているのに、今日に限って暇なのか。偶然会っただけのバトルハートに高価なおもちゃや

服を買い与えるのか。

シルバーの言葉や態度は違和感がありすぎる。

「あのねー、それでね、夜は美味しいレストラン予約してるんだって！」

「……………」

偶然会ったのに夜のレストランまで予約済み。おかしすぎる。

レッドは背中がぞわぞわとした。

「へえ……いいな。俺も一緒に行こうかな」

すかさずシルバーが口を挟む。

「レッドは店があるでしょう？ だいたいレッドこそこんなところで何をしているのですか。早く店に戻ってください。ではまた」

「バイバイ、レッドちゃん」

そのまま立ち去ろうとするシルバー。レッドは咄嗟にバトルハートの腕を掴んだ。

「ちょっと待って駄目だ」

バトルハートが首を傾げ、シルバーが振り向く。

「……………！」

シルバーの目が異様に鋭い。あきらかに『邪魔するな』と言っている。

シルバーが悪い男ではないのは知っているつもりだ。単純にバトルハートを可愛がってくれているだけかもしれない。だが……。

レッドの頭の中に『危険』の文字が浮かんだ。

「レッドちゃん、なあに？」

「え、えーと……あ、そうだ！ 赤ちゃんにプレゼントを贈りたいんだけど、一緒に選んでくれないか？」

「赤ちゃん？」

レッドがつんつんと頷く。

「んー、じゃあちよつとだけだよ」

「ありがとう！」

レッドはシルバーの腕からバトルハートを強引に奪い、ぎゅっと抱きしめた。

「シルバーはそこでちよつと休んでいてくれ。バトルハート行こう！」

そしておもちゃ売り場の棚の間に駆け込み、更に走ってシルバーから離れ、しゃがんでバトルハートと視線を合わせる。

「レッドちゃん、どうしたの？」

不思議そうに首を傾げるバトルハートの肩に手を置き、レッドは真剣な表情で言った。

「バトルハート、その、シルバーと二人で遊ぶのはやめよう」

「何で？」

「……何となく」

バトルハートが笑う。

「変なレッドちゃん！」

「……………」

何と言えばいい？ 確証も何も無いが仲間が何となく怪しく感じる時に、それを子供に何と言えば伝えられる？

「いや、本当に何と言うか……………」

レッドは深呼吸をして、バトルハートの目を覗き込んだ。

「男はみんな、狼なんだよ」

言った瞬間、レッドは後悔した。違う、もっと何か分かりやすい例え方があるはずだ。

「何それ？ じゃあレッドちゃんも狼？」

「あー、そうじゃなくて……………」

レッドが髪をかきむしったその時。

「変な想像しないでください」

後ろから聞こえた声に、レッドは体をビクリと震わせた。振り向くと、シルバーが冷やかな目でレッドを見つめている。

「まったく。変なことを吹き込まないでください。だいたい、こんな子供をどうこうなんてあり得ないでしょう？ 馬鹿馬鹿しい。」

バトルハート、行きますよ」

シルバーが伸ばした手を、バトルハートが握る。

「はい！ またね、レッドちゃん」

左手をヒラヒラと振り、バトルハートがシルバーと歩いていく。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！」

レッドは立ち上がり、その後を追って並んでいる棚の角を曲がった、が。

「え！？」

居ない。いや、まさか、一瞬で消えるなどありえない。隠れたのか？

おもちや売り場を探す。しかし見つからない。

「くそ！」

尻のポケットから携帯電話を取り出し、シルバーに掛けてみる。

「電源切ってるのか……！」

電話は繋がらない。

その後もデパートの中を探し回ってみたが、結局シルバーとバトルハートは見つけられなかった。

「どうすればいいんだ……！」

呟いて、そこでハツと思いつく。

そうだ、ラッキーなら居場所を探知できるかもしれない。

レッドはデパートまで来たというのに何も買つことなく、電車に乗って自宅へと急いで帰った。

「ラッキー！」

ドアを乱暴に開け、ラッキーを探す。

「……居ない」

何故こんな時に、何処へ行ったのか。レッドは呆然と立ち尽くした。

もうちよつと頑張ってほしいのでシ

はあ……、とコップを布巾で拭きながら溜息を漏らすレッドに、珈琲を飲みながら携帯電話をいじっていたイエローが顔を上げて訊いた。

「どうした？」

レッドが眉を寄せ、コップを棚に片付ける。

「ああ、シルバーとバトルハートがな……」

「シルバーとバトルハート？」

「……一緒に買い物をしていたんだ」

イエローはキョトンとしてレッドを見つめ、それから首を傾げた。

「はあ？ だから？」

「ゲーム機買い与えて、服を買って、美味しいレストランを予約して」

イエローが目を見開く。

「マジで！？ 俺も連れて行ってもらいたい！」

身を乗り出すイエロー。レッドはこめかみに指を当てた。

「いや、そうじゃなくて、ちよつとやりすぎというか、おかしくないか？」

「いいじゃねーか。まだ子供なんだし、バトルハートってあんまり家庭環境良くないんだろ？ 普段苦勞してる分、甘やかしてもかまわねーよ」

「ただの甘やかし……なのか？」

それ以上の何かを、レッドはシルバーから感じ取っていた。

「他に何かあるんだよ」

「……………」

あの後、レッドは何度も電話やメールをしたが繋がらず、夜になって漸く繋がったと思ったら、『何度も電話やメールをするなんて、非常識ですよ』と逆にシルバーに説教をされた。

バトルハートは自宅にちゃんと送り届けてくれたようだが、レッドの言葉に出来ない不安は消えない。

「なんか分からんが、考えすぎだ」

イエローがきっぱりと断言する。

「そう……か？」

それならばいい、それならばいいのだ。

レッドがもう一度溜息を吐いた時、イエローが手に持っていた携帯電話から、軽快な音楽が聞こえた。

その画面を確認したイエローの顔が、一瞬真顔になる。

「ちよつと、電話してくる」

イエローは立ち上がり、店から出て行った。

「……………」

レッドはイエローが出て行ったドアを、じつと見つめる。

何故出て行くのか。いつもは電話が掛かってきても、出て行くことなどない。それなのにどうして急に……。

程なくして外から帰ってきたイエローに、レッドは厳しい表情で訊いた。

「電話、誰からだった？」

イエローが眉を上げる。

「あ？ 知り合い」

すかさず、レッドは目を眇めてイエローに言った。

「元カノじゃないのか？」

イエローの目が泳ぐ。レッドが腕組みをして、首を振った。

「やっぱりそうなのか。もう会うのはやめる」

「……………」

イエローが作り笑顔を浮かべながら席に座る。

「いや、だから相談に乗ってるだけだつて」
「それでピンクが傷ついてるんだぞ」

「……………」
笑顔の消えたイエローに、レッドは噛んで含めるように言った。
「会うのはやめろ」

「……………」
イエローがカウンターに肘を付き、右手で頭を抱える。

「分かってるよ。でもあいつは、俺しか頼る人がいないって……………」
「じゃあピンクはどうする？」

「だから、ちよつとだけ相談に」

「はつきりしろよ、イエロー」

「……………」

重苦しい沈黙。

レッドはイエローを見つめ、イエローはカップに入った残り少ない珈琲を見つめた。と、その時。。

「レッドー！ あ、イエローもいるでシか」

最悪のタイミングで二階から降りてきたラッキーが、二人の間に着地した。

「なんだ、ラッキー」

レッドがイラつきながらラッキーに訊く。

「魔獣が出たでシ」

「今、取り込み中だ。悪いが後にしてくれ」

ラッキーが何処からとも無く杖を取り出し、可愛く首を傾げる。

「生意気言つと、ドカンといくでシよ？」

「ちよつと待っててくれって言ってるんだ」

「……………」

ラッキーはやれやれと息を吐き、長い耳を左右に振った。

「下僕の分際で、甘やかしすぎたでシね」

そして次の瞬間。

パン！ パンパンパンパン！

「……………！」

「うわ……………！」

イエローの前にあったカップが砕け、そして棚に片付けてあったコップや皿が、派手な音を立てて割れていく。

レッドとイエローは、呆然としてラッキーを見つめた。

「魔獣退治を、もうちょっと頑張ってほしいのでシ。でないとならラッキーの小さな影がググツと伸びて、レッドとイエローに覆いかぶさる。」

「お前達も……………砕いてしまっぞ……………」

鋭い牙、長い爪、赤く光る瞳。目の前にいるラッキーの変貌に、レッドとイエローが凍りつく。

しかしそれは一瞬で、まるで幻のように、ラッキーは元の姿に戻った。

「さ、行くでシよ」

何事も無かったかのように、ラッキーがフワフワと飛びながら明るく言う。

「あ、ああ……………」

「おっ……………」

レッドとイエローは壊れた機械のようにカクカクと頷いて、ラッキーの後に付いていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5391o/>

“魔術戦隊” 隊員募集中

2011年10月22日03時12分発行